が名和長年に下し給へる敕書あり、粲然として、光輝を放てり。古の宣命とも異なり、普通の詔勅とも異なりて、眞情流露せる者也。

後醍醐天皇の勅書

名和長年に下し給ひし勅書(後醍醐天皇)

漫々たる海上いづくともなく漂ひて、四日ばかりは過ぎぬ。二十七日の夕立にや、杵築の浦にて、西風はげしく吹いていかなるべきかと心騒せしかども、風に任せしに、夜より波の上も靜かにて、明けぬれば此彼も見ゆるに、伯耆の湊に着きぬ。楫取も今は力盡きぬと云ふを、とかくして大坂といふ所へ着きぬ。こゝ荒磯にて、釣舟だにもまれなり。此所に主といふ者も都にありければ、よしあしにつけて、答ふべきものも無し。ともなる人一人二人はなほ人求めにとて出でぬ。楫取もにげうせぬれば、あやしき苫の下に、只ひとり埋もれ居たる心の中いはん方なし。なほしなんぞ引刷りて、今は限りと待ち居たるに、船のもとに人ひとり來り、あら〳〵しくも無きは、如何なるにやと怪しきに、忠顯を尋ねて、御迎の由を奏す。うれしなんどは、かゝるためしをぞ云ふべかんめる。なか〳〵その時は心も詞も及ぶべき限にあらず。思出たる度毎に、その氣味なほ胸にあり。忠を致す輩、いづれも疎そかなるにあらねども、指當て待出たりし心ちなん譬ふべき方ぞなかりし。

忘れめや寄るべも波のあら磯を御舟の上にとめし心を

長年が忠功、後代の人にも知らせんが爲めにしるし置く也。末々の君にも見せ奉らば、いかゞ、おろかならむ。私の子孫までも、この忠は朽ちじと思へば、以正直報國として、行末久敷つかへ奉るべし。

足利義滿の文章

塵塚物語も、この時代のもの也。中に足利義滿が平家蟹を弔ふの文をのせたり。一寸面白けれど、整はぬ節も多し。ともかくもこの頃の文章を代表せる一種風變りの文章也。

平家蟹を弔ふ(足利義滿)

嗚呼悲哉、三界流轉の修羅の業は、跋提河の流におとされて、苦海の浪にしづみ、斯る蟹の姿と化生せしもの歟。可憐〳〵。過ぎし元暦の古をも、今の事よとあやまたれ、脆き涙袖に餘る。つら〳〵人間の盛衰を察するに、只是邯鄲一時の睡にも足らず。平家わづかに二十餘年のなごりも、盛者必衰の夢

のうちに來りて、終に東夷の武威にくだかれ、壽永の秋の一葉に掉して、西海の波濤にたゞよひ、浮沈の流に身をよせしも、いとあはれなりし有樣なり。比しも元暦二年の春の半ば、官軍諸所のいくさに打負けて、筑紫をさして落鹽の天子をはじめ、月卿雲客も皆一篷の滴露に涙を比し、帆を飄泊の浪にまかせて、豐前の國柳がうらに着かせ給ひて、しばしは君宸襟を休めたまひしかば、官軍一まづ安堵の思ひをなせり。斯りし處に、三月二十二日とかや。おもはざるに、範頼義經兵船數千艘にておしよせ、幡旗を春風にひるがへし、矢を射る事雨の如し。櫓械棹歌は天をふるはし、鯢波の數聲海底をとゞろかす。されば兵は凶器、武は逆德とはいへども、王土に身をよせし武夫ども、情なくも先帝の御座舟、天子の龍の天纃をも憚らず、七重八重にうち圍む。官軍今を限りと軍すといへども、天運微にして、忽ち負け、女院いけどられ給ひしかば、今は是迄なりと、二位の禪尼すゝみ出て、安德天皇八歳の君を左の脇にいだき奉り、右の手に寶劍を拔きもち、海底にとび入りたまへば、諸卿百官諸司平家の一族公達も、一つ流れに身を沈め、水の泡立つ時の間に、消えて

兼好法師の徒然草

姿もなき跡は、寄せくる浪ぞ名殘なり。そも〳〵官軍この蟹と化することは如何なればなれぬ海路の戰に七手八脚てだて盡き、嗔恚强情の恨消えやらず、弘誓の舟にほだされ、隨緣眞如の浪起つて、八苦の海に沈み、煩惱の波瀾にたゞよひて、萬卒の魂魄、天源にかへること能はず、終に水底に流轉して、寄る所なきまゝに、虫に解して、この蟹となれるもの歟。今かれが姿を見しより、むかしのあはれに袖ぬれて、

過し世のあはれに沈む君が名を留め置きぬる門司の關守

よるべなき身は今蟹と生れ來て浪のあはれに沈む果敢なさ

この外、今昔物語、今古著聞集の文躰を傳へ、更に俗に近づきて記せる史傳物、多けれども、かくべつ取り立てゝ言ふべきほどのものも無し。隨筆は、兼好法師の徒然草、ひとり光輝を放つ。之を前にしては、清少納言の枕草子と同類のもの也。筆に清少納言ほどの才は無し。觀察のこまかなる處も劣れど、さすがに識見は卓越せり。すねて、わざとらしき處もあれど、說く所に眞理多し。今の語て云へば、哲學的思想にとめり。この點は、清少納言が鯱立ちしても、及ばざる所也。其

文の精練にして簡勁、而かも男性的なること前後に比なし。その說く所、老莊儒佛に出入し、之に自家實驗の感想を加へて、人生の機微をうがてる節多く、頗る痛快なるを覺ゆ。

よろづにいみじくとも、色好まざらむをのこは、いとさうぞくしく、玉の盃の底なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめずまどひ歩りき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさくるさに思ひみだれ、さるは獨寢がちに、まどろむ夜なきこそおかしけれ。さりとて、ひたすらに、たはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

俊成卿の『戀せずば人の心もなからまし、物のあはれは、これよりぞ知る』の意を敷衍したる者にて、さりとは粹な坊主哉。高師直の爲めに艶書を代筆せしとの說あれど、隨分艶書もかきかねまじき也。色を解する也。色に迷ふにあらざる也。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらてのみ住みはつる習ならば、いかに物のあはれもなからむ。世はさだめなきこそいみじけれ。命ある者を見るに、人ばかり久しきは無し。かげろふの夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくぐと一年をくらす程だにも、こよなう、長閑けしや。あかず惜しと思ゞは、千歲を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ、住み果てぬ世に、見にくき姿を待ち得て、何にかはせむ。命長ければ、耻多し。長くとも、四十にたらぬ程にて死なんこそ、めやすかるべけれ。その程すぎぬれば、形をはづる心もなく、人に出交らはん事を思ひ、夕べの日に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなん淺ましき。

老莊風の人生觀、達人の面目躍如たるを覺ゆ。

公世の二位のせうとに、良覺僧正ときこえしは、極はめて腹あしき人なりけり。坊の傍に大なる榎木ありければ、人、その木の僧正とぞ云ひける。此名しかるべからずとて、かの木を伐られにけり。其根のありければ、切りくひの僧正といひけり。いよ〳〵腹立ちて切くひを掘り捨てられたりければ、其跡大なる堀にてありければ、掘池の僧正とぞ云ひける。

嘲り得て痛快也。

ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて、もちたりけるを、ある人、御相傳、うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風かゝむ事、時代や違ひ侍らむ。おぼつか無くこそと云ひければ、さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれとて、いよ〳〵秘藏しけり。

滑稽の妙を得たる者也。

花は盛に、月は隈なきをのみ、見る物かは。雨に向ひて月を戀ひ、たれこめて春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢散り萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、花月にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければとも、さはる事ありてまからでなども書けるは、花を見てといへるにおとれる事かは。花のちり、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり、今は見所なしなどいふめる。

達觀の士なる哉。

悲田堯蓮上人は、俗姓は、三浦の某とかや。さうなき武者なり。古郷の人の來りて物語すとて、東國の人こそ、云ひつるとは頼まるれ、都の人は、こと受けのみ善くて、實なしと云ひしを、聖、それは、さこそ思すらめども、己れは、都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは、思ひ侍らず。なべて、心やはらかに、情あるゆゑに、人のいふ程の事、けやけく辭び難くて、萬、え言ひはなたず。心弱くこと受けしつ、僞りせむとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、自から本意通らぬこと多かるべし。あづま人は、我方なれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより否といひて止みぬ。賑ひゆたかなれば、人に頼まるゝぞかしと、ことわられ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あら〳〵しくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、此一ことばの後、心にくゝなりて、おほかる中に、寺をも住持せらるゝは、かく柔ぎたる所ありて、その益もあるにこそと、おぼえ侍りしか。

世態人情をかみわけて、而かも天眞流露せる高士の趣を見るべし。兼好は、眞

面目にして重厚なる人也。而して亂世流離の間に修養をつみて、大悟したる人也。さは云へ、枯木冷灰にはあらず。滿腔の覇氣、筆に迸りて、言々人を刺し徒然草一篇、徹頭徹尾、眞理をふくみて、厭世思想の中に、溫味あり。眞に尊げなる文字也。徒然草ありて、國文の隨筆、爲に寂しからず、世稱して、日本の論語と云へるも、過言にはあらざる也。親房を正にして大なるものとすれば、兼好は奇にして高きもの也。

室町時代の紀行

この時代には、紀行多し。宗久の都のつと、良基の小島のくちすさみ、貞世の道行ぶり、嚴島詣記、正徹のなぐさめ草、堯孝の伊勢紀行、覽富士記、雅世の富士紀行、雅康の富士歷覽記、兼良のふち河の記、宗祇の筑紫道記、堯惠の北國紀行、道興准后の廻國雜記、實隆の高野參詣日記、公條の吉野詣記、玄旨の九州道の記、東國陣道記、勝俊の九州のみちの記、武人の作にては、足利義輝の住吉詣、太田道灌の平安紀行、北條氏康の武藏野の紀行、蒲生氏鄕紀行などあり。いづれも、土佐日記の衣鉢を傳へて、唯歌や詩を多く陳列せるのみにて、風俗人情を精記せるにはあらず、山水自然を描けるにもあらず。今日の日記に、毛のはへたるものに過ぎず。其中にて、

廻國雜記は、紀事こそ短に過ぎて、さばかりの、味もなけれど風景を賞翫せんとの目的もありて、足跡尤も徧し。ふち河の記は、應仁の亂の頃の一條兼良の紀行也。はじめには、

胡蝶の夢の中に、百年の樂を貪り、蝸牛の角の上に、二國の諍を論ず。よしと云ひ、あしと云ひ、たゞ假初の事ぞかし。とにつけ、かくにつけて、ひとつ心を惱すこそ愚かなれ。應仁の初世の亂よりこの方、花の都の故鄕をば、あらぬ空の月日のゆきめぐる思ひをなし、ならのはの名におふやどりにして、六かへりの春秋を送りむかへつゝ、うきふし繁き呉竹のはしになりぬる身をうれへ、こひぢに生ふるあやめ草のねをのみ添ふる頃にもなりぬれば、山の東、美濃の國に、武藏野の草のゆかりをかこつべきゆゑあるのみならず、高砂の松のしる人なきにしもあらざれば、さみだれ髮のかきくもらぬさきにと、みのしろ衣思ひたつことありけり。この月は、よろづに忌なる物をといふ人ありけれど、人の事は知らず、我身にとりては、この七日に生れたれば、かへりて、よき月と思ひはべるものをと有りしかば、きく人、ことわりとや思ひけ

む。さるほどに、二日の明方に、奈良の京を立て、般若寺坂を越え、梅谷など云ひて、人はなれ、心すごき所々を經て、かものわたりを過ぎ、三日の原といふ所に興を止めて、思ひつゞけ侍り。

數ふれば明日は五月のみかの原今日まつ奈良の都いてつゝ

泉川を舟にてわたりて、

渡し舟棹さす道に泉川今日より旅の衣かせ山

一條兼良の文章

などありて、恰も醜女のこて〳〵おつくりせるが如し。されど、この彫琢もはじめの方のみにて、後に至りては、粗雜也。兼良は、應仁の亂時代の太政大臣也。進んで關白となりたる人也。知識ひろく、才學拔群の人也。自から曰く、われ菅公にまさること三あり、攝家たること一也。太政大臣たること二也。延喜以後の事を知ること三也と。嘗て人に招かる、床頭に菅公の畫像をかゝぐ。かゝる人を我上座におくこそ心得ぬと、機嫌を惡くせりといふ。兼良より前に、房嗣が關白となりけるが、兼良は怒に禁へず、將軍義勝の母にとりすがりて、之を罷めしめて、自から代りたる也。以上、兼良の人となりを推すべし。よしや、關白となりたりとて、學識宏博なりとて、小人也、匹夫也。公事根源、文明一經志、樵談治要など、其著書、頗る多し。これらに至りては、ふち川記の冒頭とは異なりて、平談にして達意を主とせるもの也。ともかくも、學問文章、この人が戰國時代のはじめの明星也、而して細川幽齋が戰國時代の終りの明星也。國學國文の系統は、幽齋より出て、江戸時代に入りぬ。

細川幽齋の覺書

細川幽齋覺書の一節

一、陣を取候はゞ、前後の道筋を見おくものにて候。敵國の樣子により、或は一里、或は五六町にても見まはし、惡しき所あらば、取草を出しおくべく候。竹木にても同前に候。道筋不案内にては、俄の時十方なきものにて候。たとへ道にて無之候共、被通べき所あらば、心をつけ見候事、肝要にて候事。

室町時代の書翰

覺書は幽齋が自筆にてしるして、家士三宅某に傳へたる者也。當時、國歌國文壇上の明星が、かねて武に通じたる一斑を見るべし。同時に、この時代の書翰躰も、まづこのやうなものなることを知るべし。足利尊氏の帷幕にも參したる僧玄惠の著はせる庭訓往來は、平安朝の末の明衡往來にならひて、この頃の書翰躰

のお手本也。されど、一般には庭訓往來ほどには、四角張らずして、幽齋のこの覺書のやうな文躰が普通に行はれしなるべし。

小說の物語すたれて、お伽噺が起れり。桃太郎、猿蟹合戰などは、この際に起りて、口より口につたはりしなるべし。御伽草子に、この頃の兒童的物語があつまれり。

御伽草子

一寸法師の一節

生れおちてより、せい一寸ありければ、頓て其名を一寸法師と名づけたり。年月を經るほどに、はや十二三になるまで育てぬれども、せいも人ならず、つくづくと思ひけるは、唯物にてはあらず、唯化物風情にてこそ候へ。我如何なる罪の報にてかやうのものをば、住吉より賜はりたるぞや。あさましさよと、見る目も不憫也。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを何方へも遣らばやと思ひけると申せば、頓て一寸法師、この由承り、親にも、かやうに思はるゝも口惜しき次第かな。何方へも行かばやと思ひ、刀なくては如何と思ひ、針を一つ乳母に乞ひ給へば、取り出したびにける。即ち麥藁にて柄鞘をこ

連歌俳諧の隆盛

しらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然舟なくては如何あるべきとて、又乳母に御器と箸とをたべと申し受け、名殘惜しくとゞむれども、立ち出でにけり。

和歌は、鎌倉の初にて、技巧の頂上に達し、それより下りに下り、而かも技巧を弄せむとするの風は盛になりて、一變して、連歌となり、俳諧となりたり。これ文學上の一遊戯に過ぎず。平安朝の詩人が對偶にうき身やつせしことがうつり、歌人が歌の贈答に技巧を弄せしことがうつり、新古今集時代の匠氣がうつりて、こゝに連歌となり、俳諧となりて、文學上の一大遊戯が出來たる也。而して其勢盛になりて、文筆の才あるもの、多く之に從事し、爲めに本當の文學發達せず、文章も從つて衰微したり。たゞに亂世の故のみにもあらざるべし。

蓮如上人の御文章

今一つ、此時代の文章として、忘るべからざるものあり、所謂御文章、これ也。その數、多し。これ眞宗八代の英僧、蓮如上人の作也。平易流暢にして、よく理をつくし、情をつくせり。江戸の貝原益軒の文、心學諸家の文、明治の世になりては、福澤諭吉の文など、その躰を學べるに似たり。文例として、さきに、鎌倉時代の章中に出したれば、こゝには、かゝげず。

第六　江戸時代の文章

日本の文章を說きて、上古を終はり、平安朝を終はり、鎌倉時代を終はり、室町時代を終はりて、今や、江戸時代に至りけるが、之を四季に譬ふれば、冬を過ぎ、春を過ぎ、夏を過ぎて、秋にあへるが如き心地す。上古は冬也。祝詞、宣命、古事記は、松柏の雪中に鬱蒼たる也。平安朝の初の竹取物語、伊勢物語、土佐日記は、早梅の初春につぼみたる也。紫清二女出でし頃は、これ春風駘蕩、百花爛漫の時也。紫式部を櫻とすれば、清少納言は紅梅也。和泉式部は桃也。鎌倉時代、和漢混淆文の起りたるは、初夏の新綠也。室町時代は、百日紅、百合などの夏をかざれるが如し。江戸時代にいたりて、諸種の文豪勃興したるは、野に七草あり、山に黃葉紅葉ある秋の景色也。漢文の圓熟したるは、蘭菊などの日本化したる也。和文、即ち擬古文の復興したるは、櫻の返り咲き也。

江戸前半の漢學者

德川二百年の太平は、各方面に、天才を出したり。德川家康は、好學の主也。林道春を用ゐて、制度文物を司らしめたり。道春は、世々德川幕府の學政を司れる

漢學の隆盛

林家の祖也。漢學者として偉大なると共に、國史に通じ、國文をもよくせり。實に和漢を兼ねたる偉人也。一方には、細川幽齋より宮廷文學傳はりて、國學起り、和歌和文傳はり、俳諧傳はり、俳句も起りぬ。かくて、元祿時代にいたりては、伊藤仁齋、荻生徂徠、貝原益軒、室鳩巢、新井白石、安藤爲章、大宰春臺などの學界の偉人、多く、學和漢をかねたり。國學國文の方面には、幽齋の流をくめる北村季吟あり、獨立せる契冲あり、芭蕉は俳句を大成して、俳文を盛にし、近松門左衛門は、院本を大成し、井原西鶴は、小說を創めて、文運の隆なりしこと幾んど空前也。この時代の漢學は、平安朝の漢學とは異なりて、宋明の學風をうけて、哲理の研究が盛になり、林家は朱子學を傳へ、中江藤樹は陽明學を奉じ、仁齋は別に古學を起し、徂徠は別に古文辭學を起し、かく相競ひて、漢學は益盛になり、別に折衷派も起り、終に寬政の三博士出でゝ、異學を禁じて、朱子學のみが榮えたり。士大夫の學問と云へば、即ち漢學也。從つて、漢文は幾んど國文のやうになれり。國學國文は、眞淵起り、宣長起り、篤胤起りて、一方に雄視し、和歌和文も、一方に榮えたり。されど普通文としては、漢文行はれ、和漢混淆文行はれたり。その和漢混淆文も、學者の隨筆あ

江戸時代の漢文

り、小說あり、戲文あり。議論說明の文は、多くこの躰によれり。外に口語躰の文も起りたり。文化文政の頃には、元祿時代ほどの天才は出てざりしかど、文運の最も成熟したる時代也。上には、松平樂翁あり。下には、寛政の三博士以外、漢學者頗る多く、蜀山人、馬琴等の文豪も、この際にいでたり。

江戸時代の特產といふべきは、俳句也、俳文也、小說也、院本也、脚本也、狂文也、口語躰の文也。以前の文章に比して、殊に目立つは、議論文の多くなりたること也。而して、この時代の末には、西洋の飜譯も多くあらはれたり。

漢文は、先づ荻生徂徠、李王の流をくみたれど、大手腕也。降つて、寛政の三博士、即ち柴野栗山、尾藤二州、古賀精里にいたりて、唐宋の風を學びたるが、以後その風、天下を風靡し、佐藤一齋、齋藤拙堂、頼山陽、鹽谷宕陰、安井息軒などいでゝ、以て明治の世に及べり。日本歷史は、多く漢文にてかゝれたり。之を前にしては、大日本史あり。之を後にしては、野史あり。外に頼山陽の日本外史、日本政記最も有名也。漢學の思想より出てたる議論文は、多く漢文にてかゝれたり。三百年の間、手腕の大なる者、頗る多し。かくて、漢文は、第二の國文となりたるが、かゝる手腕

頼山陽の日本外史

を轉じて、國文に用ゐなばと、いと惜まるゝ也。明治の今日にいたるまでも、なほひろく讀まるゝは、頼山陽の日本外史也。思ふに、日本に漢字ある限りは、この書は、日本國民によまるべし。もし歷史を以てすれば、山陽は、歷史家に非ず。もし學問を以てすれば、山陽は學者に非ず。單に文章を以てするも、山陽の手腕は大ならず。彼は、才子肌の人也、其器小也、されど、一種の氣骨を有し、一種の批評眼を有して、文に氣あり、才情あり。日本外史は、日本國民の武勇を描きて、青年の氣を皷舞するに足る。その書きぶりは、青年初學の士に投合す。吾人は、漢學者の手によりて、かゝる國民性を發揮せる、國民の讀本たるに足るべき、一篇無韻の叙事詩出てたることを感謝するもの也。されど、もし文のみを評せば、山陽の文は、田舍廻りの役者の藝也、桧舞臺の藝に非ず。司馬遷の史記などに比すれば、大人の前の小兒也。

漢學者にして、國文を以て歷史をかきたるものも少なからず。之を前にしては、新井白石の讀史餘論、藩翰譜、之を後にしては、成島司直の德川實記、外に湯淺常山の常山記談、いづれも世に重んぜらる。白石には、別に平安朝の日記を學びた

る自叙傳あり、折焚く柴の記、これ也。文躰やゝ古し。白石は、才智の人也。政治家として、今の大臣の力はある人也。學は、和漢に通じ、かねて、西洋にも通じたりしこと、當時にありては、異數也。歴史家として偉大也、語學にも長ぜり。もと漢學が主にして、漢詩漢文をよくす。なほ國文家としても、獨特の妙ありて、手腕大也。日本の文章史上の一大文章家也。讀史餘論は、その識見の非凡なるを見るべく、藩翰譜は、その叙事の筆の大なるを見るべし。もし之に德の分子、情の分子を加へなば、折焚く柴の記は、優雅にして人を動かすものありしなるべし。

新井白石の文章

藩翰譜の一節(新井白石)

重宗職に任じて後、毎日決斷所に出づる處、西面の廊下にて、遙に拜する事ありて、さて決斷所に至る。此所には、茶磨一つをすゑおき、あかり障子を引たてゝ、其内に坐し、手づから茶をひきながら、訟をきゝ分つ。人皆この事どもを不審しあへり。されども、問ふ事も得ならず、遙、年へて後、問ふ人のありしに、答へて曰く、先づ決斷所に出づる時、西面の廊下にて、遙に拜する事は、愛宕の神を拜する也。多くの神の中に、殊に、愛宕は、靈驗あらたなりと聞きし程に所願あて、斯くは拜しぬ。かの所願といふは、今日、重宗訴をことわらむに、心に及ばん程の事あらじ。若し誤つて私の事あらんには、立ち所に命を召され下さるべしと、年頃ふかく頼み參らする上は、少しも私心あらむには、世になからへさへ給ふなど、日毎に祈誓するにて候。又、訟を分つに明かならぬは、わが心の事にふれて、動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は、自から動かぬやうこそあらめ、重宗それ迄の事はなりがたく、たゞ我心の動くと靜かなるとを試んには、茶をひきてのみぞ知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じ、磨のまはること平にして、きしられて落つる所の茶、いかにも、こまかなり。茶の細かに落つるに至りて、我心も動かずと知り、其後漸くに訟を分つ。又あかり障子を隔てゝ、訟を聽くことは、凡、人の顔額を打見るより、にくさげなると、あはれがましきとあり、誠しきあり、奸しきあり、其品多くして、いくらといふ數を知らず。見候處の、誠しきと思ふ人の云ふ事は、誠と聞かれかたましきと見る人のなす事は、直くしても、皆僞と見ゆ。あはれがましき人の訟は、まげられたる處あるよと思はれ、にくさげなる人の爭ふは、ひ

が事ならむと覺ゆ。これらのたぐひは、我目に見る處に、心を移されて、彼等言葉を出さぬうちに、早我心のうちに、よこしまならむ、正しからむ、直ならむと思ひ定むる程に、訟の言葉を聞くに至りては、我思ふ方に、其事きゝなす事多し。訟のなるに及びては、あはれがましきに、惡むべきあり、にくさげなるに、あはれなるあり、誠しきにいつはり、奸しきに直き、この類殊に多し。人の心の知りがたき、容貌を以て定めむこと叶ふべからず。古の說を聽くに、色を以てきくことあり。それは、おほはるゝ處なき人のことなるべし。重宗が如きは、見る所について、心おほはるゝ事多し。又さなきだに、訟の庭に出てんは、おそろしかるべきに、まして、生殺を司る人を見ては、まばゆくいぶせくて、おのづから云ふべき事をも得言はで、罪にも科にもあふ人あらむと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには如かじと思ひて、かくは坐を隔つるにて候と語りしとなり。抑も、日々に神明に祈りて、私なからむ事を誓ひ、まづ我心を內外より養うて、正しくなして、其後に訟を聽き、政をなす。これしかしながら君に仕ふるに、力をつくすの致す所なれば、古の循良の吏といふとも、いかでか此人に過ぐべき。

漢文訓讀と國文との關係

新井白石は、踵を親房に接して、實に日本文章史上の一大偉人也。されど元祿前後の漢學者は、大抵、國史國文をかねたり。隨筆、記錄、政治、道德等の文字、漢文直譯躰ならずして、今日の普通文と大差なきもの多し。これ一は、漢文の訓み方に關係す。平安朝時代には、漢文を反讀するに、日本化したる讀み方を爲せり。江戸時代にいたりては、一代の儒者たる道春は、さすがに、國史國文にも通じたる人にて、その反讀は大に日本的也。例へば、

事君盡禮、人以爲諂也、

を、道春點は、

君に事ふるに禮を盡しぬれば、人以て諂へりと爲す。

と訓みけるが、降つて、一齋點にいたりては、

君に事ふる禮を盡す、人以て諂ふとなすなり。

と訓むに至れり。一齋點は、全く漢文直譯也。されば、江戸前半の漢學者は、假名交り文を書きても、所謂和漢混淆の要を得たりしが、後半以後は、一齋點の示すが

如く、漢文直譯となり、引きつゞきて、明治の前半に及べり。白石の外、徂徠、蕃山、益軒、鳩巣、芳洲、爲章、春臺などは、儒宗にして、かねて、當時の普通文の大家也。

安藤爲章は、水戸光圀に聘せられて、大日本史の編纂にあづかりたる漢學者なるが、國學にも通じて、光圀の命を奉じて、契冲に學びたる人也。紫家七論、源氏物語を批評して、其文章と云ひ、識見と云ひ實に空前也。漢臭はあれど、ともかくも批評眼を有する者也。

安藤爲章の文章

紫家七論の一節（安藤爲章）

此の物語、專ら人情世態を述べて、かみ中しもの風儀用意を示し、事を好色によせて、差刺を詞にあらはさず、見る人をして、よしあしを定めしむ。大旨は、婦人の爲に諷諭すといへども、おのづから、男子の戒となること多し。ひとつふたつを擧て例せば、桐壺の帝の色をおもんじて、更衣に寵愛すぎさせ給ひ、人のそしりを、え憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしを、上達部うへ人より始め、天が下のもてなやみ草にならせ給ふは、帝德のはづかしき御事にして、御代のみかどを諷諫し奉るにあらずや。且源氏の君をわたくしものに思ほして、御元服より以下、なに事も東君におとらずもてなし給ひ、ようせずば、儲位をもとりかへまほしう見えさせ給ふは、叡心のあさましきならずや。弘徽殿のおしたちかど〳〵しき所ものし給ひて、御門の御なげき、事にもあらずおぼしけるは、后妃の德いづ〳〵にかおはします。こゝもとを讀み給ふ女御后より以下、その風儀用意を顧みたまはずば、又あしきさまのうたてき名をおひ給ふべし。次に箒木の卷の品定は、一篇の女識なれば、女といふ女によみ習はせたくこそ。又空蟬と軒端の荻が圍碁のさりさま、閨中もぬけの衣といきたなきと、敎戒あらはなるものなり。その空蟬が無にしてやみなんと思ひはてたるは、用意いみじきものにして、式部が志なり。また次に、夕顏がもてならしたる扇に、をかしうかきすさびたるは、すき〳〵しきとがや、なほおもからぬなるべし。さるは、あまりやはらかにおほどき、物ふかくおもきかたのおくれたるより、はたして横さまに身まかりぬ。これを聞く女は、あだなる人にすかさる事をおもふべし。源氏のうかびたる心のすさびに、人をいたづらにし、我御身も堤の程にて、馬より落

て、いみじく御心ちまどひたるは、貴公子のしのびありきをいましむ。惟光がかゝる道にゐて奉りたる罪は、猶淺からず、近習たる人、これを思ふべし。これより以下の卷々皆この眼をつけて讀み侍らば、其人の行跡情態、かゞみにうつす如く、妍醜のがるゝことなく、世のいましめとなりなん事、作者の本意にして、いだづらに作るにはあらざるべし。

貝原益軒の文章

貝原益軒は、今にいたるまでも、精神界の偉人也。其人格大にして高し。明治の世の福澤諭吉、やゝこれに近きもの也。學ふかく、識ひろし。日本の聖人ともいふべき人也。その著述、頗る多けれども、その文、よく和漢を調和して、平易の妙をきはめたり。その著書、各方面にわたれど、訓戒の書、殊に尊ふべし。道德の文章は、江戸時代の第一に推すべし。

大和俗訓の一節(貝原益軒)

不仁にして、吝嗇なれば、財多くもちても、人をすくひめぐむこと無し。吝嗇ならざる人も、仁愛に心を用ゐざれば、其施なくして、かへりて、無益の事に財をつひやす。一兩事をあげていはゞ、門内に饑に及べる乞食貧人來りて、食をこへども、心を用ゐて、是をめぐまざれば、家のやつごも食を與へず。又寒夜に、客來りて語るに、客にしたがひ來れる下部などを、屋の内寒からざる處に入れ置き、こゝえざるやうにするは、いとやすきことなるに、客に對するに專らにして、まぎらはしく、從者の寒氣にくるしむべきを、心にかけざれば、彼がうゑこゝえを知らずしていたはることなし。是、心を用ゐざればなり。善を行ふに志あらむ人は、萬の事、折ふしにつけて、心を用ゐて、人のくるしみなからむことを思ひはかりて、人をすくふべし。

益軒は一生、和歌のみをつくりて、漢詩は作らざりしとの事也。其漢文は自娛集にあつまれり、なほ和臭あり。思ふに、益軒は、漢詩漢文を輕んじたり。さは云へ、益軒は學者一方の人にあらず、足跡天下にあまねくして、紀行多し。樂訓中の四季を叙せる文など、其文藻を見るべく、其詩想をも見るべし。居然たる文章の大家也。

室鳩巢の文章

駿臺雜話の一節(室鳩巢)

秀康卿越前に封ぜられたまひし後、阿閉掃部とて武功の譽ありしものを、厚

祿にて召し抱へられけり。又狛伊勢とて是も國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初せさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧着する事をたのみけり。さて饗繕すみ、祝の杯に及びし時、伊勢、今日は令息が鎧の着初にて候まゝ、御身の御武功のこと御物語候ひて、彼に御聞せ候へといひしに、掃部、いや、某が身の上に御話申すべきほどの武功は覺え申さず候ふ。されど、御望みも默しがたく候まゝ、某一生のうちに武者振の見事なる士を一人見申して候ふ。其事を話し申すべし。江洲志津ヶ嶽の戰の折暮方に、某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、後よりことばをかけし故、馬を引きかへし候へば、御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ、身不肖ながら、御相手になり申すべしとて、進みより候ふ故、それこそこなたも望む所にて候へとて、互に馬を乘りはなし、すでに鎗を合はせむとしけるに、その人しばし御待ち候へ、今朝より雜兵をおほく突き崩し候故、鎗よごれて候ふまゝ、鎗を洗ひて御相手になり候はむとて、余吾の湖に鎗をうちひたし二三遍あらひつゝ、さらばとて突き合ひしが、久しく勝負なかりしほどに、日も暮れはてゝものゝあやめも見へずなりぬ。その時、彼の方より又ことばをかけ、もはや鎗先も見えず候ふ。御殘り多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし、御名こそ承り度候へ、某は青木新兵衛と申す者にて候ふとて、某が名をも承り候ひて、この後また陣頭にて出て合ひ候はゞ、互に人手にはかかり申すまじく候ふ。もし又味方にて候はゞ、わりなく入魂いたし候ふべし。さらばとて、たち別れしが、これほど見事なる武士は、遂に見侍らず。いかゞなりはて候にかと語りけるに、そのころ、伊勢がもとに心安く出て入りする青木方齋といふ浪士あり。その日も來て勝手よりにじり出てつつ掃部に向ひて、さても唯今の御物語承り、今更むかしを思ひ、涙を落してこそ候へ。其時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候ふ。かく申すばかりにては、うきたることにおぼすべく候とて、其の時雙方の鎧のおどし、馬の毛色を、一々いひけるが、一もちがはざりければ、掃部驚きつゝ、さて〳〵久しくてあひ候ひて、本望に候とて、手前にありし盃を方齋にさし、これをしるしにとて、腰のわきざしを抜きてひきけり。それより、方齋が名

國に高くなりしほどに、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部とおなじ祿にて召し出されけりとぞ。

室鳩巣は、白石と同門の學友なるが、人格を云へば、白石は、世才もあれば、俗氣もあり、小にして精悍也。鳩巣は大にして、君子人也。駿臺雜話一篇、以て其國文にすぐれたるを見るべし。右の文は、その中の一節也。

熊澤蕃山（蕃山芳洲春臺）には、集義和書、三輪物語などの著あり。雨森芳洲には、たはれ草あり。大宰春臺には、獨語あり。いづれも、白石、鳩巣と騁馳するに足るべき文豪也。柳澤淇園（柳澤淇園の文章）には、雲萍雜志あり、文格、白石に比して、小なれども、輕妙也。

雪萍雜志の一節（柳澤淇園）

伏見より年七十歳計なる老翁、土偶人瓦器の類を荷ひて洛中を售りあるくあり。常に商ふ家に來りて、食事をする折から其家の奉公人大勢集り、彼の翁に言ひけるは、おん身の荷ひたる者は其價如何程の品なりやと問へば、翁答へて、銀十五六匁ほどの荷なるべしと云ふ。又問ふ、京の町は人の行きかひ繁ぎところにて若し過ちて皆碎くるまじきものにあらず。左樣の時は如何するかと云へば、これこそ過ちなれば、さることなしとは云ふべからず。さある時は、其事を有の儘に述べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷位は情にて借り受けて商ひ申するなりと云ふ。又問ふ、其上にも、又碎くるまじきものにあらず。其時は又如何するやと詰りいへば、如何に問屋なりとて、數度の無心もいひ難ければ、其折こそ、其許達の如く、奉公なりとも致すより外に詮方なしと云へりとぞ。

拂子の賛（柳澤淇園）

拂子の賛に云ふ、遊ばんことをほつす。遊びて足らず、樂まんことをほつす。樂みて足らず、僞らむことをほつす。僞りてたらず、貪らむ事をほつす。貪りて足らず、終に盜まんことを欲す。

荻生徂徠は、儒界の豪傑也。其漢文の手腕の大なること、江戸時代第一也。餘力、國文をつくる。南留別志一篇、以て其一斑を見るべし。其太平策は、一篇の政治論なるが、漢文をかきくづしたやうなものなれど、全くの漢文直譯躰にはあらず。

荻生徂徠の文章

太平策の一節(荻生徂徠)

人を知るを以て、人君の大德とするなり。愚なる人は、人を知ると云は、あまねくの臣の賢愚を悉く知らむとす。是れ道を知らざるの過ちなり。たとへ聖人の智なりとも、あまねく知りつくすとは、ならぬ事なり。賢人を知て擧げ用ゐ、委任すれば、其賢人が段々に又賢者を薦達する故、殘る賢者は無き事なり。されども、第一の難儀は、一人なりとも、賢者を知ると難きものなり。習俗の内に陷りて、其眼より見ては、我眼ゆがむによりて、賢者は見えぬものも也。見え難きものを、よく知る故、是を大德とする事也。又愚なるものゝ料簡には、人を知ると云は、人の人がら長短得失を知り盡して、其人を用ゐる事はならぬもの也。人を用ゐる道は、其長處を取りて、其短處をばかまはぬと也。長處に短處はつきて離れぬものなる故、長處さへ知れば短處は、知るに及ばず。唯よく長處を用ゐれば、天下に棄物なし。必ず長處短處をつゞさに知らむとすれば、短處を氣遣ふ心つよき故、長處を快く用ゐるとならぬもの也。堯の鯀を見そこなひ、周公の管叔、蔡叔を見あやまり給ふにて、聖賢の人を用ゐるやうを知るべし。必ず過なからむとするは、聖人に勝らむとする也。されども、其長處を知ると難し。是れ亦愚なる人の誤り也。唯其人をながめ居て、其長處を知らむとするゆゑ、一生ながめても見えぬ也。人は活物なり、過し昔を見て、其人を知り極むる事あるべからず。用ゐて見れば、長處は顯るゝ者也。委任すれば、長所は益働きて、今迄無き才智も生ずるは活物なる故、人君の用ゐやうにて、人才を養ひ成し、器量の人出來る也。われと我身にても、吾才の長所を知らぬは、用ゐて見ぬ故也。まして人の才能を用ゐずして知らむとするは、神通を得むと願ふに似たり。愚なるの甚しきに非ずや。故に書經に采采とありて、人を知るには、とかく用ゐて見るが、聖人の道也。古に書と云るは、書經なり、書經の語は、かくの如く平易にして、しかも實用あることとなるを、後世の儒者、聖人を信ずること淺きゆゑ、書經を讀むこと能はず、孔子の後世に垂れ給へる御心を空くするは、淺ましきこと也。されども後世の人君、人を用ゆること能はず、賢才を知ること能はず、安民の心に住せざる故、己が物ずきに合せて、人を使んとす。人の氣質區々なるを、

皆我ものずきに合さむとすれども、いかで同じやうなる人あるべき。されども人君の威德によりて、此心を以て人を用ゐれば、下又人君の心に合さむとす。是れ阿諂逢迎の生ずる本にて、人才愈出來ぬ也。人の氣質區々なる故、長處又思ひの外なる物也。氣質の我と異なる人を用ゐる時は、彼が長處我短處を補ひて、人を用ゐる益を得ることなるを、臣をば唯使ひものと覺え、我心に合せて使はむとし、備さなるとを一人に求めて、過を咎むるとつよき故、今時の官人は、しおちのなきやうにとはかり立廻ると、世の風儀となりて、何事も例を引き云ひ合ふを專とす。是によりて、愚庸の人も、大役を勤むるとなり易く、その果は、人の才智自から生ぜず。よく用ゐば、才能生ずべき人も、皆愚庸になりゆく也。其愚庸なるを見ては、今の世には、賢才なしと云ふは、孟子に云へる、歳を罪する類なるべし。天地の德にて、何れの世にても、其世に用ゐるほどの才能なきと云ふことは無きことなるを、吾智の足らぬは知らずして、世に賢才なしと云へるは、淺ましきこと也。古の世に、國に賢才なしと云へるは、上に賢才なきことを云ふ也。盛世には、賢才、上にあり、衰世には、賢才、下にあり。是れ又古今の一轍にて、萬古不易の常理也。

江戸後半の漢學者

今の普通文と、幾んど差なし。條理井然、筆力縱横、今の世の時文家にも、これほどの手腕は、稀也。今日の普通文實に江戸の初世、徂徠、蕃山、益軒、白石、鳩巣、芳洲、春臺、淇園等の手に、幾んど大成せられたるもの也。

江戸の後半にいたりては、漢學者は、漢文に偏し、國學者は和文に偏し、前者は國文をつくるも、漢文直譯体多く、後者實用に遠く、また益軒、白石と騁馳する程の文章家は出てず。漸く、湯淺常山の常山記談、成島司直の德川實記、藤田東湖の常陸帶などあるのみ也。帆足萬里は、この時代の識者也。東潛夫論、一篇、其識見を見るべし。

帆足萬里の文章

眞淵宣長の神道（帆足萬里）

神道は、元、國家を治るの道にして、巫祝の道に非ず。巫祝は、神に事るの役人のみ。中古の時、僧空海、神道を佛法に引合せ、後世是を兩部神道と名付たり。是よりして、神道あらぬ者となりたり。山崎闇齋、是を嫉て、盡く其言を紬けて、更に陰陽五行など、漢説とは云ひながら、儒教にもあらぬものを揑合す。

賀茂眞淵、本居宣長が徒、更に其非を斥して、盡く漢說を除て古に復せむことを求む。一通りは尤なれど、眞淵、宣長、元是れ文人にして、更に敎を興すの人に非ず。故に大和魂眞心など古にも終に聞かざる怪しき名目を唱ふれど、神道は名こそかはれ、實は孔子の忠信を主とし、過て改に憚る勿との玉ひしと、一なるとを知らず。かく云へばとて、余又神道を援て儒敎に入るゝには非ず。孔子の敎もと、人倫の道にして、即ち國家を治むるの道なり。佛法などの如き方便の敎に非ず。孔子も宋に在ては縫掖の衣を衣玉へり。今の儒者房主の如くも剃髮もせず、山伏の如く惣髮にもならず、近古以來、見苦く月額をも剃り、袖のなき上下をも衣るなり。故に名こそかはれ、忠信を主とし、過て改るは、天道至極にして、何の國にもあれ、眞の道は、必ず此に止るなり。さて細節の備するを、儒敎を以て補はゞ、鐵砲を以て軍陣に備へ、遠鏡を以て天學を助け、麻黃大黃を藥用に備るが如し。尤も儒敎に非ずとも、他敎を取ても、神敎の不足を補べけれど、唐の邦たること、本邦と尤も近く、文事其外藝術多く唐より習得たれば、手近き儒敎を取たるなり。且近世西洋人の言の

國學復興

江戸時代の擬古文

如く、人儒の道は、孔子之を大成し、他敎の及ぶ所にあらねば、此を取ること、尤も宜き理なり。天文地理醫藥器械などの學は、唐よりは西洋勝れば、近來は、專ら西洋を學ぶ、學者よく知るところなり。眞淵、宣長、かゝる理を知らず、又崇神、應神二帝の御心をも知らず。故に其學ぶ所、巫祝の作法、さては歌學也、絕て身を修し國を治むる說なし。これ豈神道とするに足らんや。

徂徠の文に比すれば、一齋點にかぶれたる書き方なれども、全くの漢文直譯躰には非ず。

江戸時代の學問と云へば、漢學なりしかど、一隅には、また國學も榮えたり。國學復興は、當時の普通文に影響を及ぼすこと大也。之れを前にしては、北村季吟、之を後にしては、塙保己一など、國學を以て、幕府につくしたる人也。契冲、春滿、眞淵、宣長、千蔭、春海、篤胤、信友、與清、濱臣、高尙、春庭、義門、成章、景樹など、歌文を以て、古典を以て、文法を以て、神道を以て、世に貢献せし所、少なからざる人也。所謂和文は、王朝の文章を摸擬するものにて、擬古文とも稱す。一種の裝飾品にて實用のものにあらず。木下長嘯、林道春より、一歩進んで契冲となり、眞淵となり、千蔭とな

り、春海となり、宣長となり、高尚となり、濱臣となりぬ。其中にて、春海の擬古文、最も尊し。春海は、小說をものせしことあり。石川雅望は、當時の擬古文家の最も巧緻精妙なるもの也。上田秋成また文才すぐれたり。されど、惜むらくは、人物小にして俗也。荒木田武遇女が、擬古文を以て池の藩屑、月の行方二書をつくりて、大鏡增鏡とならびて、和文の歷史をものしたる意氣は、取るべけれど、文は云ふに足らず。松平樂翁は、臺閣の身を以て、感心にも、古臭ある文章をつくりたる人也。國學者の中にて、伴蒿蹊のみは、擬古文も作りたれど、また和に偏せず、漢に偏せざる普通文をつくりたる人也。閑田耕筆、近世畸人傳など、みな見るべし。こゝに、國文世々の跡より摘出すべし。

いにしへの國文躰をみるべきものは、祝詞宣命のみか、辭をとるは、國史なるべし。

と云ひ、進んで、

中古躰といふもの、躰ひろし。物語の類には、伊勢、源氏は更也。うつぼ、竹とり、大和、おちくぼさごろもなど、委はものがさま〳〵なれど、詞みなめてたし。

枕草子は、別に隨筆なるものから、物語にたぐふべしや。詞のさま、又めてたし。榮花は名にも似ず、花おくれて、いと實樣なるもの也。日記は、土佐日記、冠なるべし。後にいたりてさま〳〵あれど、とりたてゝをかしといふべきもの少なし。序は、古今集序、大井川行幸序、ともに、紀土州、書きたまへれば、また類なきものにて、此後、宴會序、撰集序、皆是に倣へりと見ゆ。

と云ひ、なほ進んで、

近體といふべきもの、ふるくは、大中臣輔親家集序、文字の音がちにつくられたり。一條兼良も書たまへるもの多し、皆近躰なり。この頃より後は、文章といふべきもの、地を拂ひて見えず。凡近體をまなぶには、眞名がちなるをいとはず、俗なるを避くべし。近世木下長嘯子、文章は中古躰をしたはれしが、或は富麗にも、或は枯瘦にも、心のゆくまゝにて、中にはざれたる物もあり、才ある人なれば、俗なる病は少なし。たゞ花に過て、實にともしとや云はむ。北村季吟、契冲、阿闍梨など、其志は異なれども、ひとしく和學に名あり。其故にや、文章も又よろしと見ゆ。荷田氏春滿、文章力ありて、優なるものなり。

本居宣長の文章

此門人賀茂の眞淵なる人、文章いと上手にて、ふる〳〵しく、其さま一家也。文章好む人は、もとめて見るべし。

など云へり。この文には、和の分子多けれども、畸人傳にいたりては、漢の分子多し。白石、益軒を、漢六和四とすれば、蒿蹊は漢四和六ぐらゐの比例なるべし。なほ、中古以來の和文をあつめたるものは、前に扶桑拾葉集あり、後には八洲文藻あり。みな水戸家の出版にかゝるもの也。

本居宣長は、江戸時代國學界の大王也。頭腦明確、博學多才國學を大成せり。今の世なら、大博士の學位をさづけても可なる人也。唯儒學を排斥せるは狹けれども、當時の時勢上止を得ざるものなるべし。その人となりは、博大也。智の人也。之に比して、眞淵は情の人也。篤胤は意の人也。宣長は、擬古文をものしたれど、漢三和七ぐらゐの文も多し。古事記傳は、宣長の生命也。玉勝間は、隨筆なるが、議論もまじれり。その中より、こゝに摘出すべし。

漢意（本居宣長）

漢國には、凡人の禍福、國の治亂などすべて、世中のよろづの事は、みな天より爲すわざとして、天道、天命、天理など云ひて、これを上なく、尊く、畏るべきものとぞすなる。さるはすべて漢國には、まことの道傳はらずして、萬の事はみな、神の御心御しわざなることを、え知らざるが故に、みだりに造りまうけて云へるものなり。そも〳〵天は、たゞ天つ神たちのまします御國のみにこそあれ、心あるものにあらざれば、天命などいふことあるべくもあらず。神を尊み畏れずして、天をたふとみ畏るゝは、たとへば、いたづらに宮殿のみを尊みそれて、其君を尊み畏るゝことを知らざるが如し。然れ共、外國には、萬は神の御しわざなることを知らざれば、此天道天理の說を信じ居らむも、さることとなるを、皇國には、まことの道の正しき傳へのありながら、それをば尋ね思はずして、たゞ外國のみだりなる說をのみ信じて、天といふことを、いみじき事に心得居て、萬の事に、その理をのみいふは、いかにぞや。又太極、無極、陰陽乾坤、八卦五行など、こと〳〵しくこちたく云ふなる事ども、たゞ漢國人のわたくしの造說にて、まことには其理とてはあることなし。然るに神の御典をとくともがら、もはらこれらの理をもて說くなるは、如何なるし

れわざぞや。近き頃にいたりて、儒意をのぞきて說くと思ふ人も、なほ此天理陰陽などの說のひがごとなるをば、え悟らず、其垣內を出離るゝこと能はざるは、なほ漢意の清くさらで、かれにまどへる夢の、未だたしかに定めざるなり。又天照大御神を、天津日にあらずとするも、漢意の小き理にかゝはり泥みて、まことの道の微妙なる深きことわりあることを思はざるものなり。此大御神天津日にまし〳〵て、その御孫命、天より降り坐て、御國しろしめす御事は、人のちひさき情をもて、其理は測りしらるべきにあらず。己が智もてはかりしること能はざるを以て、其理なしとおもふは、例の小さき唐ごゝろなるをや。

前の帆足萬里の文とあはせ見なば、面白かるべし。宣長は若き時は、達者に漢文をつくりたる人也。學ひろく、識も大なるを以て、當時の國學者の中にては、議論文をもよくしたる人也。博大なる宣長は、古今集遠鏡には、言文一致躰を用ゐたり。たとへば、

みよし野の山の白雪つもるらし、故郷寒くまさるなり。

の歌を解して、

今夜は、吉野山の雪がいかう積るささうな、それて、此邊までが、だん〳〵、寒さがまさるぢや。

と云へるが如し。言文一致躰は、慶長年間、既にお安物語あり。

お安物語の一節

子ども集りて、おあん樣、むかし物語なされませと云へば、おれが親父は、山田玄歷というて、石田治部少輔殿に奉公し、近江の彦根におられたが、そのゝち治部どの、御謀反の時、美濃の國、おほ垣の城へこもりて、我々みな〳〵一所に、御城にゐてじやつたが、不思議な事がおじやつた。よな〳〵九つ時分に、たれともなく、男女三十人ほどの聲にて、田中兵部どののう、田中兵部殿のうとおめきて、そのあとにて、わつと云うて泣く聲が、よな〳〵おじやつた。おどましや、〳〵、おそろしうおじやつた。

これ江戸のはじめの言文一致躰也。降つて、心學起るにいたり、心學の書も多く出てたり。中にも、義堂の安樂傳授の如き、口語文語とりまぜて、縱橫自在也。蓮

如上人の御文章、益軒の教訓書の流れをくみて、更に言ひくだきたるもの也。其中にて、鳩翁道話など、言文一致躰也。

鳩翁道話の一節

貧乏金持によらず、女は夫の家にかしづけば、先方の親たちを、我親として、つかへるが道じゃ。其大切な舅姑御が、御病氣のときに、ゑかき花むすび、茶や花では、御介抱は出來ませぬ。出入の按摩やをなご衆の手をからず、嫁御が眞實に親たちの肩こしをなでさすりして、御介抱をなさるゝが、嫁御の道でござります。其道の修行に、按摩の御稽古はまだかと申したのでございます。とかく役に立つ御稽古が肝要じやといはれました。

平田篤胤の文章

平田篤胤は、國學者中の豪傑也。學者としては、宣長の範圍を出てず。されど、一種の宗教家として、奮鬪して、新生面をひらけり。其文の猛烈なること、佛教界の日蓮と好一對也。著書多し。其中には、言文一致體のものも多し。

さて、今日と、此の次の會日と、二日に演說いたす處は、兼て申したる歌道の粗まして、人たる者は、誰とても、歌は詠むべきものて、また道の眞も、これに依つて辨へらるゝゆゑん、又その歌詠む心ばへ、また萬葉家といふ訣、また近世の近世家の歌よみのひがごと、また歌歌をよまんとする心得などの事を、鈴屋翁が說を本と致して、かたはら、先達の說、また篤胤が思ひ得たるとどもなどを、採交へて、演說いたすことてござる。夫につけて、心得べきことがある。

平田篤胤の書簡

これ篤胤の歌道大意のかき方也。宣長を孔子とすれば、篤胤は孟子也。左に篤胤が伴信夫に與へたる書簡を錄して、この頃の書簡體の一斑を知るに便すべし。信友は、篤胤、與清と共に、當時國學の三大人と云はれたる人也。江戸時代には、明衡往來、庭訓往來の如き往來體は、公の文書に用ゐられて、私用には、鎌倉時代より起りたる候文體を用ゐ、反讀する文句も多かりし也。今の書翰體と、大差なし。

伴信友に與ふ(平田篤胤)

こゝに小弟身上の事申し候。果てしもなき申しごとながら、絕窮の樣子、前後をつゞめて、この節の苦み、まづ暮には、あてもなきに、春になりてと、あたり前に借金方を盡く斷り、どうやらして、年はとり候處、たかて八人扶持ばかりをこね廻し候事故、なにとして參るべきや。そこへ旦那方角火消故、その火

事場の出醫を申しつけられ、これも無人ゆゑなりと、目付が賴む同樣に申し候ふ故、ひつ込もならずと受け候ふ處、火事羽織なし。それのみならず、醫者は醫者だが、藥箱の上覆なしといふ私の事、そこて大騷して、苦む所に、駿河より眞柱の料一兩來る。ところが未だ年始に出てず。外はうつちやつておいても、本でも借る所へは行かねばならぬから、それをもつて、まづ人の「(曲げたる、即ち質入したるの意)たる熨斗目をかり出して着て、たゞ一日に年始をつとめ、翌日もとの穴へ納めて、それて火事羽織、藥箱の上覆を買ひ、まづほつと息をつくと、去年門人のわるものが、藏本版を「たる十兩のしりが來て、板を先へひきとられむとするに、これに當惑、どうしても先が聞かぬから、同心を賴み、おしぶせに待たせて、六月まて、安心にはなり候へども、これにも一ち圓ばかり。もつとも人にかりて、利を出したり。まづよいと思ふと、去年大煩ひの砌りに「たる本ども、元利ともに十兩ばかりのものだん〳〵斷り申しおき候へども、十四五ヶ月になる故、流れるといふに、ことに、人を入れて、すゞ暫しといひても聞かず。そこて、佩物にて、まづ利分半金のかたに入れてをさめたり。すると去年春、下女が深切て、もとは予に聞かせず(病中なればなり)彼が服類を三兩半「たるが、流れるといふて、櫛の齒をひくが如く、「屋がせひに(これは今以てまづだまして置おし付置)所が、三月に近より、去年三月「たる雛が流れるとて來る。これを流しては、娘が泣くから、このあたりの苦勞いふばかり無し。そこて虛病をかまへて、例の火事羽織と、ふだん着用羽織とを入れて、一兩貳朱半にて受け出したれど、節句の日に、子どもに着かへさする事叶はず、今年始めてふだんのまゝにて、節句をさせ候。外へ出るなと云ひつければ、おとなしく居り候。二人の子もどが心內ふびんさ、野弟心內御察し下さるべく候。所へ和名抄の寫しが出來たといつて、その料をよこせといふ、やれ、これかれ、貳朱、一歩、二歩の借りは、櫛の齒をひくが如し。例の島ちりの小袖一つ入る所、漆ぬりの如くなりて、入湯にも、行かれぬ仕合、羽織がないから、內會も出來ず、この節のさりさま、億萬中の一を申し上げ候ふも、かくの如く候ふなり。それ故、屋代へも、塙へも、本を借りに行くことは出來ず候ふなり。この中にて、古史傳の著述は、怠りなくあひつとめ申候。御憐み下さるべく候。

江戸時代の書簡

さて古人も貧を語るは、求むる事あるに似たりとか申す事にて、他人には申しがたき事ながら、心ありて、君には申し候。それはその中にて、よくその學をするとさきに、ほめられんといふ弟の情にて、なか〳〵以て一兩や、二兩や、三兩や、四兩のめくされ金を望むがやうに思し召され下さるまじく、そこらのいやしき心は、露ばかりもこれなきこと、神と君とは、いとよくしろしめさむ、しからば、この事を語る心の實はいかにといふに、とてもこの分ではとり續きがたく、なか〳〵に、やしきの入口邪魔になり候故、暇をとつて、浪人となり候うてかへつて、よき術も出來べくと存じ候ふなり。これは、首くゝらうと思ふ、いかにと相談するたぐひにて、しかせよと、のたまはぬ君なる事は知りながら、あまりぢれたさに、かくは思ひつき候事なり。いづれ大行は細瑕をかへりみがたき場も御座候ふこと、御汲わけ下さるべく候。ア、〳〵。

學者の清貧、古今一轍也。この書簡、俗語をまじへて、縱横自在、篤胤の面目、紙表に躍動す。一般の書簡は、これより俗語を除き去りたるものと見て可也。

伴蒿蹊の國文世々の跡の中に曰く、『百年以來、俳諧文章といへる一種出來る。

芭蕉の俳文

こは彼者流の文章にして、和文の列にはあらねど、其かたにとりて、上手のかけるは、目覺る心地する者なり。あしきは、なつかしからぬ詞づかひに、しひて、柏子をさへあらせむとしたるが見苦しき也』と。俳文は、江戸時代の一產物也。擬古文が、國學者の間に行はれしが如く、俳文は俳人の間に行はれたり。而して、擬古文に於ける、村田春海と俳文に於ける横井也有とは、好一對の名文家と云はるゝ所也。されど芭蕉は、俳句に於て生面を開きたると共に、また俳文の先達也。芭蕉の俳句も、俳文も渾然として大也。其人格大にして俗を脫す。西行以上也。この道の聖也。その句も、文も、氣高く、尊きこと、江戸時代、第一也。

閉關の說（松尾芭蕉）

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、あはれなるかた〳〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひのほかの句ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關も、もる人なくはいかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の波の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど、老の身の行末を

むさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして、罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、僅かに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寐がちに朝起したる、ね覺の分別、なに事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱增長して、一藝すぐるゝものは、是非の勝るもの也。是をもて世のいとなみにあてゝ、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて、生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破劫し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば、無用の辨あり。出ては、他の家業をさまたぐるもうし。尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫、自から書し、みづから禁戒となす。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

芭蕉門下の支考、許六、去來、嵐雪等いづれも俳文をものしたれど、横井也有ひとり、俳文の粹を得て、飄逸にして、氣高し。許六の俳文は、華に失す。去來の鼠賦には、韻をふめり。兒戲に類する者也。芭蕉及び其門下の作は、風俗文選にまつまれり。許六の編輯せる所也。許六の作にては、旅の賦が最も面白きが如し。

許六の俳文

旅の賦（五老井許六）

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは、皆俳諧の情なり。我翁白川の田植の歌を聞初、奥羽の間をめぐり、高舘の夏草に兵共か夢を驚かし、あつみ山の夕涼には、吹浦を詠め、佐渡に横ふ天の川に、初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて、七百三十餘程を吟ず。曾良か落髮の力量を感じて、一鉢の飯を分て、風流を盡さる。ひとひ芭蕉庵をたゝき、繪の雜談に及ぶ時、予に旅十躰の繪をかゝせて、讃して何某が求めに應ず。其風雅にたより、俗語をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ、奥の細道草枕の類にはあらず。

旅店のさま、上段に書院床劍菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶かたぶけて居たり。底に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし出女のたて島は、春秋をしらず。根太板敷は落て、隅々まで奥とゞかず。

天井襖は雨もりにきはづき、鐵行燈はくらく、紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢賣草鞋賣にせがまれて、やう〳〵に枕をかたぶけ、心よき寐入ばなは、馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜のあけてふためくつらもにくし。

大名の寐間にもねたる寒さ哉

道つれの上をいはゞ、船頭の臀づくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合、一僕の跡にさがるをねめまはし、鷄のなかぬに、つれの男を起して、夜道を行くを手柄とし、入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〳〵といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も、此情にかなへり。海道の賣物に、餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば、未來焔王の前にて、からきめを見るといへり。寒天にも冷索麵をすゝむるは、逢坂の茶屋。饅頭のほか〳〵と見えたるは、見付の臺也。卵子の煮ぬきたるは、木曾の棧。はな紙は竹にはさみ、錢の看板筒をかけたり。昆蒻の田樂は何ものゝ喰けるぞ。

乘かけに春の密柑やうつの山

舟川の上、馬駕籠の情、しば〳〵かぞへがたし。五月の大水もかり借の手形に出入、おのが筆の戸は流るれど、首たけの借錢を納して、しばらく息をつくものは、島田金谷の賊なり。水の淺深を何文づゝとこたへたるは、大きなる洒落也。天龍の中の瀨は、馬人足を空にまとふ。乘る人は股たけ入て、荷を肩にかけて待ち、あがるものは負れ支度して、舟端に立つ。旦那か鑓をかたねたるは渡場の情なり。馬士駕籠舁は、輕重に月日を送り、一盃の酒に浩然の氣をやしなふ。一生を漂々瓢々とすまして、雲介の號を蒙り、炎暑の日も玄冬のあしたも、榎の木の下に眠りて蟻の都に到る。終に飲食を座敷につかず。汁かけて出す馬士の食と作られ、小便ははしり、ながら、吸がらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金は嚔鼻褌に結ふ。一とせの名殘も暮て、世にある人々のことぶく月日を出替の季と定めけるは、世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出がはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしは、おほけれ。獨坊主には宿をかし兼、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霽の夕暮に情ふかきあるじは、長持くさき布子かして、ぬれたるものを燒火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしかみ付て、しばらく足を休れども、極の札場より追おとされて、却てのらぬ前より股をすくめ、兩方の手に枝を携てあゆむべしとも見えず。人間病死の到來は時も所もまたず、醫療のたすけうとく、懷中のふり藥はやう〳〵急病を防ぐ。巡禮脚の族は路頭に倒れ臥し、片目なる肝煎に追たてられ老僧の慈みにて門下に入る。おとろへかさなり、終に黃泉の下に赴く。かねて何國の土とならん終をしらず。犬走の土中にこめて、年の齡、衣類の摸樣を小札にしるされて、何國のいかなる人といふ名もしらずなり行く也。岡部の辻堂の笠に經文をよみて、同行の別を惜み、隅田川の念佛を尋て、我子の古墳にのぼる。今來古往の人旅懷の情を盡して風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみてこたびみちのくにおもむき、不二都鳥の二句を求めてすみやかに故郷に歸る者は、貞室老人なり。東海道の一すぢも、しらぬ人の風雅におぼつかなしといはれし、翁の聲耳の底にとゞまる。

也有の俳文

也有の俳文は鶉衣にあつまれり。

長短解（横井也有）

大はよく小をかね、短は長にまかるゝためし、世にその類多かり。たゞ君を賀し、人を壽ぐにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは、龜の尾山の尾を引て、五百八十七曲と、祝ひものするには、あくかたあらずかし。その餘は、ひたぶるに、十八さゝげの內たけきにならへば、獨活の大木の謗をのがれず。矮鷄の足はみじかきを愛し、禿が返事は、長きにのどけし。出る杭かしらうたれて、つゐの益なく、下手の詮議のとまりかねては、軒の柳もぬむり顏なり。たゞ女の髮こそめでたくてあらましを、手ながき人は、一門にもとほざけられ、鼻の下の延びすぎたるは、大事の相談にもらされて、其夜の溫飩の長きを知らず。されば、必ず長きは、短きが上にも立ちがたし。物はたゞ秋の夜の長くてよからむは長く、難波潟みじかき蘆の長からずしてよきは、みじかくて

あらなん。さるを聖人も右の袂の自由をものずけり。世に式法をこまかにさだめてかね合極るものもあれど、そのむつかしき境は、人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然に備へて、寸分の詮議は無し。摺粉木は兩手に握るを程とし、杓子、さい槌は、片手にたれり。下ざまの物ながら、天理のままなるこそ、たふとけれ。我友田氏、過し頃、かりそめの旅のつとに、煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋、西郊にあそぶ事ありて、調賓はなはだ長きにまされり。是をくはへて手をからず、久しくして齒を勞せず、ゆく〳〵野山に雲を吹き、あく時は、袖にをさむ。張子が馬を懷にするが如し。こゝに於て感あり。つひに長短の解をつくりて、是をむくゆの詞にかふ。其辭の長過ぎたるは、まだ才の短きゆゑならむかし。

袋賛（横井也有）

器は入るゝものをして、己が方圓に從はしめむとし、袋は入るゝ者に從ひて、己が方圓を心とせず。實なる時は、肩に餘り、虛なる時は、懷に隱る。虛實の自在を知る布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

狂文

蜀山人の狂文

月花の袋や形は定まらず

和文の如く、よわ〳〵しからず、漢文の如く、四角ばらず、簡勁にして、よく和漢を調和し、飄逸洒脫の裡に、禪味あり、老莊の趣あるが、俳文の特色也。而して、和歌より出てゝ、狂歌あり、俳句より出てゝ、狂句あるが如く、俳文より出てゝ、狂文あり。俳文に、西鶴の浮世草子の躰を加へて、滑稽を主としたるもの也。蜀山人（太田南畝）の洒脫、風來山人（平賀鳩溪）の奇拔狂文の尤なるもの也。風來山人は、骯髒不平の人、文自から痛快也。蜀山人は、達人也、正にして大、狂歌、狂文の聖といふべし。

奉加帳の序（蜀山人）

燕斜が別業に題せし日は、裏中おのづからまん〳〵たりしが、朝三暮四のいとなみも引込み、紫衣の隱居となりては、澁團扇をばうちすてゝ、柿の衣の奉加せよと、さる大檀那のすゝめに任せ、鬼の念佛の大津畫の萬人講の、僅に心もいとゞせりなづな、五行たびらこ佛の座、臺座後光も煤びたる、すゞなすゞしろ箔しろの建立、おもへば春の一籠の、土一舛に金一舛と、つかへ兵衞の冥加錢は、御心持次第、秋の七草一葉づゝ、御志をまつの葉の、ちりも積れば山々

風來山人の狂文

有りがたく奉存候。以上。

放屁論の一節(風來山人)

世の諺に、剪遜するも浪人の習ひと、御所櫻の伊勢三郎、風俗太平記の日本左衛門なんど、浮瑠璃本にある時は、さも手強く侍らしく聞ゆれども、夫は血臭い時節の事にて、かく治れる時世にそんなけびらひが有や否や、とんだ目に逢ふ故に、今時の浪人は、紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌、猶いつまてか活き延るほど耻の上ぬり、但浪人のみにあらず、春さきの華鱗魚と目出度き御代の侍は、段々に直が下り、工農商の三民に養はれる素餐のやうに思はれ、まさかの時は侍てなければ、世は治まらず。日本は小國でも、唐高麗から指もさゝせぬは、皆武德なりといふ事を思ひ出す者もなきは、是ぞ誠に太平の世の御恩澤、井をほりて飲み、耕して食ふ、提燈かりた禮は云へども、月日に禮を云はざるにひとし。段々太平の化にあまへ、世上一統金銀にのみ目がつく故、先祖はお馬のさきに進み、義は金鐵よりも堅く、命は塵芥よりも輕しと踏み止まりて、高名を顯したる家柄の子孫でも、又君を諫め、萬民を敎へ、國の礎を堅うせんと心を碎く忠臣でも、算盤の桁に合す見一無頭、早急の金にならねば、二一天作言語道斷、六沈が二進雪隱が決ちん穴のせまい仕送り用人に乘り越され、さてはお家に由緒ある數代出入の町人でも、不如意になれば安くあしらひ、昨日今日まで手代奉公、年季野郎の成上りでも、金さへ持てば追從輕薄、御堅勝御安全樣の字までをひねくり廻して六かしく認るは、地獄の沙汰も金次第、金は敵の世の中、されば歌にも『鉦敲き金がない故鉦たゝく、金があるなら、金は敵かじ』又『それにつけても金のほしさよ』といへる下の句は、いづれの歌にも連屬すると、卑劣千萬に覺え、富士郎が鐘入も、金の供養といふ故に、若し才覺の計策にもと、味な處へ目のつく世の中、此間さる方にて、だん〳〵と不如意につき、一家中鑓の稽古をやめにして、鈴の稽古がはじまりしとの噂、よく〳〵聞けば、鑓といふ字は、金篇に遣といふ字、鈴は金篇に令といふ字なれば、遣ふ事はやめにして、只々金を令よと、あて字ながらも主命は默止がたし、いかなる名人達人でも、金なき衆生は度しがたしと、佛もあちらむくと見えたり。

京傳の狂文

風流業平飯（山東京傳）

月の武藏のひらけてより、花の吾妻の賑はひなるや、花の上野に立ち並ぶ、土手の櫻も春過ぎて、夏は凉みの舟あそび、月すみだ川の秋暮れて、雪をみめぐりまつち山、松の千とせも萬代も、あとたれ給ふ淺草寺、大慈大悲の智惠の海、わたりくらべし料理はさま〴〵、四季をり〴〵の献立に、野菜のくさ〴〵、魚鳥のさま〴〵、新しきをいどみ、めづらしきを巧む四方の料理家多かる中、礎かたき岩付町に、よき商ひをみの家といへる料理店、御贔負御蔭をもつて、日にまし賑ふ御禮かた〴〵、何をがなと考へあたりし今度の新製は、お藏蜆の名にゆかりて、業平めしとは名づけたるいみかけによしぬ主が工夫、風雅は胸にあり原や、參會仕立の器さへこと〴〵く新にして、蒔繪の模樣は都鳥、いざこと問はんとすみだ川の末ながく、賣出しのあたる日より來つゝ慣れにし美濃久へおんかへりみを賜はらば、あるじが幸甚しからむ。

以上の三文にて、狂文のあらましを知るべし。最後の京傳の文は、商店の引札也。今の世の如く、新聞に廣告するといふことなければ、名家にたのみて、文章を面白可笑しくして、顧客の目をひかんとしたるもの也。引札文學は江戸時代の一現象也。京傳のみならず、他の名家も、多く引札の文をつくれり。七五調を帶びかけ言葉多く、名詞にて句をとめること、この頃の小説にも見え、狂文にも見ゆる所也。京傳は、狂文をよくせるのみならず、洒落本に寫生の才筆を揮ひ、讀本體の小説をつくれり。馬琴に比すれば、小説家としては小なれども、文に才氣ありて輕妙なるは、まされり。

脚本

院本

近松門左衛門の文章

演劇は、江戸時代の特産物也。之に伴へる脚本も、特産物也。されど、今日の脚本と、さかりの差もなし。演劇の前に、操人形あり。之に伴ひて、院本出てたり。近松門左衛門之を大成し、つゞいて、紀海音あり、竹田出雲、竹松半二など出て、平賀鳩溪も院本の作あり。嘉永の頃、朝顏日記出てゝより後は、院本の創作は、全く其跡をたちたるが、之を語る義太夫節は、なほ今の世に盛に行はる。院本は、謠曲と同じく、半は韻文にして、半は散文也。江戸時代より今にいたるまで、日本國民の性情に適合して人を動かしたるは、竹田出雲の忠臣藏也、之を演劇にして、今もなほ觀客を惹く。されど、院本の大家は、近松門左衛門也。小説に於ける井原西鶴

と共に、元祿の花也。否日本文章史上に於ける第一流に屬すべき偉人也。門左の作、世話物凡三十篇、時代物は之に四五倍す。その力を注ぎしは、時代物なるべけれど脚色に重きを置きすぎて、不自然なる處あり。世話物は、材を當時の出來事に取りて自然にして、よく人を描けり。今の世の所謂戲曲、小說の本意を得たるもの也その文の巧緻精妙なること、日本文章史上に卓立す。酒顚童子の中に、富豪の驕れるさまを描き來りて、

金の冠着ぬばかり

と書きたるを見て、去りたる人ありしが、翌日往いて見れば、

しやく(笏、癌)は持病にありとかや

と云ひ落したるを見て、いたくその奇才に驚けりといふ話あり。曾根崎心中の、

此世の名殘夜も名殘、死にゝ行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一と足づゝに消えてゆく、夢の夢こそあはれなれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が、六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞納め、寂滅爲樂とひゞくなり。

の一節は、古來世に賞贊せらるゝ所也。門左衛門の如きは、所謂錦心繡腸、咳唾珠を成す者にして、文藻粲然、筆華手に隨うて生ず。はなやかなれども、同情あふれて、浮華ならず、精練の文字、實に門左衛門に於て、はじめて之を見る也。

油地獄の一節(近松門左衛門)

この節句、越すに越されぬ河内屋與兵衛、手筈の合はぬ古袷、心ばかりが廣袖口、さげたる油の二升入り、一しやう差さぬ脇差も、今宵こじりの詰りの分別。茶屋の拂ひは一寸遁れ、拔差ならぬこの二百匁有る所にはあらうがな。世界は廣し、二百匁などは、誰か落しさうな物じやと、後を見れば小提燈、河といふ小文字は、こちの親に南無三寶と、差いたる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付け身を忍ぶ。德兵衛は氣もつかず、豐島屋のくゞりそつと明け、七左衛門殿お仕舞かと、つッと入れば、これは〳〵德兵衛樣、此方はまだ仕舞はず。天滿の端まで行かれます。私は取り紛れ、お見舞も申さぬに、ようこそ〳〵。この際は、與兵衛樣の事につき、いかい御世話でござんしよと、蚊帳より出づれば、されば〳〵、御身は稚い娘御達の世話、われらは成人の與兵衛に世話をやく。何れの道にも子に世話やくは親の役、苦勞とも存ぜねども、引きつけて

一所にある中は氣も落ちつく。あのやうな無法者を勘當すれば、自暴を起し、明日火に入るもかまはず、謀判似せ判、一貫夕の銀に十貫夕の手劵して、一生の首つながるゝ例もある事と思ひながら、生の母の追ひ出すを、繼父の我等、輕薄らしう留められず、聞けば順慶町兄が方に居るとやら、若しこのあたりへ狼狽へて見えましたら、七左衛門殿御夫婦言ひ合はせ、父親は合點、隨分母親に謝言いたし、胴性骨入れ替へ、二たび内へ戻るやうに、御異見ひとへに頼み入る。こちの女房お澤が一家一門皆侍、その習はしか思ひ切つては見返へらず、義理がたい生れ付、それに似ぬ道樂者、本親の旦那も行儀强く、義理も情も知つたる人、二人の子供に心をつくすは皆故旦那への奉公、今、與兵衛めを追ひ出し、一生荒い詞もきかぬ親に、草葉の蔭より恨をうくる、無果報は此德兵衛一人、推量なされお吉樣と、烟草にまぎらして返せ咽るこそ道理なれ。むう、思ひやりました。こちのも追付歸られう。逢うてお話しなされませ。いや〳〵、何家も今夜の事、萬事のお邪魔、これ此錢三百、女房が目顏を忍び、つい懷へ入れて出た。與兵衛がうせたらば、追付正氣に赴き、さつぱりと肌の物でも買ひ居れと、ゆめ〳〵我等の名を出さず、七左殿の心付か如何なりとも、御機轉頼み入ると差し出す。後の門口、お吉樣お仕舞かと、おとづるゝは女房お澤が聲、德兵衛びつくり、ばつ、逢うては氣の毒、かくれたい。卒爾ながら御免下されと、隱るゝ蚊帳のうしろ影、これ〳〵德兵衛殿、我女房に隱るゝとは何事。惡性する年てもなし。むう、又與兵衛が事くやみにか。如何に繼しい子なればとて、餘りに義理すぎた。しんじつの母が追ひ出すからは、こなたの名のたつことは無い。この三百の錢のためにやるのか。つね〳〵に身をひつめ、儉約してあいつにやるは、淵へ捨つるも同然。その甘やかしが皆毒飼ひ、この母はさうで無い。さあ勘當といふ一言口を出るがそれ限り、紙子着て川へ陷らうが、油ぬつて火に投らうが奴が三昧。惡人めに心うばゝれ、女房や娘は何になれ。さあ〳〵先へいなしやれと押し出す。はて、いぬるなら、連れ立たう。和女もおじやとひきたつる。母の袷の懷より、板間へがらりと落ちたは何ぞ。綜一把に錢五百。のう情なや、耻かしと、我身を蔽ひ、おしかくし、聲をあげ、德兵衛殿、眞平ゆるして下され。これ

は内の掛けの寄り、與兵衛めにやりたいばかり、わしが五百盗んだ。二十年添ふ中、隔心へだての有るやうに情ない。私に隠して、あの錢やつて下さる志、詞ではけん〳〵と慳貪に云うたれど、心て三度戴きし。何を隠さう。彼奴は立派好もする奴、取りわけ祝月、鬢付元結を調へ、人交りも爲たからう。生れてこの方節句々々缺ぬに、この月斗り、身祝ひもしてやりたさ。見苦しいこの耻辱をさらすも、お吉樣頼んで屆けむ爲め、まだ此上の根性のなほる藥には母が生肝を煎じて飲ませといふ醫者あらば、身を八つ裂きもいとはぬ身、子故の闇迷はされ、盗みしてあらはれた。耻しうござると斗りにて、わつと叫び入りければ、道理々々と夫の歎き、子をもつものは身にこたへ、行末思ふお吉の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとゞ涙を添へにけり。

父母の歸るを見て、心ひとつに打肯づき、脇差拔いてふところに差いたるくどり、さらりとあけ、つッと入るより胸もくろも落しつけ、先にから門口に蚊にくはれ、長々しい親の愁歎聞いて涙こぼしました。むゝ、そんなら皆聞いてか。よう合點參りしか。如何にも能う合點しました。唯今より眞人間に成て孝行つくす合點なれども、かんじんお慈悲の錢が足らぬ。というて親兄には云はれぬ首尾。二百匁ばかり、勘當のゆりるまで貸して下されといふ目の色も誠らしく、さうした事もと思ひながら、兼ねての僞りこれも亦、その手よと思ひかくして、ふうゝ、まがまがしいあの虚言はいの。まだ尾鰭つけていはしやんせ。ならぬと云うては、きつうならぬ。これ程男の冥利に掛け誓言立てゝもなりませぬか。はあ〳〵何とせう。借りますまいといふより心の一分別。そんならこの樽の油二升取替へて下さりませ。それは互の商ひうち、貸借せいては世が立たぬ。成程つめてと賣場にかゝり、消ゆる命の燈火は、油量るも夢の間と、知らて升取り柄杓取る。後に與兵衛が邪見の刃、拔いて待てども、見ず、知らず。祝うて節句もおしまひなされ。こちの人ともわり入つて相談、ある金なれば、役に立てまいものてなし。五十年六十年の夫婦の中も、儘にならぬは女のならひ、必ず我を怨んてばし下さるなといふ内に、燈油に映る刃の光、お吉びつくり、今のは何ぞ、與兵衛さま。いや何てもござらぬと、脇差後に押しかくす。それ〳〵きつと目もすわつ

て、のう、恐しい顔色、その右の手爰へ出さしやんせ。おつと脇差もちかへて、これ見さしやれ、何も無い〳〵と云へども、お吉身もわな〳〵、あゝ、こなさんは小氣味の悪い。必ず傍へよるまいと、跡しさりして寄る門の口、あけてにげんと氣をくばれど、はて、きよろ〳〵何おそろしいとつけ廻し〳〵、出合へとわめく一聲、二聲またず飛びかゝり取つてひきしめ、音ぼね立つるな女めと、喉笛のくさりをぐつと刺す。刺されて惱亂手足をもがき、そんなら聲立てまい。今死んでは、年はも行かぬ三人の子が流浪する。それが可愛い、死にとも無い。金も入るほど持つてござれ。助けて下され與兵衛様。おゝ死にともない筈、尤もゝ、こなたの娘が可愛いほど、己れも己れを可愛がる親仁がいとしい。金拂うて男たてねばならぬ。あきらめて死んで下され。口で申せば人が聞く。心で御念佛、南無阿彌陀佛、〳〵と引きよせて、右手より左手の太腹へ、刺いてゑぐり拔いては切る。お吉を迎ひの冥土の夜風、はためく門の幟の音、あふりに賈塲の火も消えて、庭も心もくらやみに、打まく油、流るゝ血、踏みのめらかし、蹈みすべり、身内は血潮の赤づら赤鬼、邪見の角

小説

西鶴の文章

をふりたてゝ、お吉が身をさく劍の山、目前油の地獄の苦、軒の菖蒲のさもしげに、ちゞの病はよくれども過去の業病のがれ得ぬ、菖蒲刀に置く露の、玉もみだれて息絶えたり。

門左衛門が院本の祖なると共に、井原西鶴は、小説の祖也。二人を比すれば、門左は、誠實也、沈鬱也。西鶴は豪放也、洒落也。門左は身を世間に投じて、共に泣き、共に笑ふ。西鶴は、世間を下に見下して、顏に笑へど、腹に涙あり。門左の文は、剪裁の美をきはめたり、美人の盛粧せるが如し。西鶴の文は一氣呵成縹渺として神韻あり。門左は、文の聖也、西鶴は、文の仙也。門左の院本は、それ〴〵脚色あり。西鶴の小説は、後世の小説の如くに筋が立ち居らず。斷片的のものなれども、觀察鋭利、快筆、世態人情をえぐりて、元祿の社會、紙上に躍出す。其文、俳句より出て〻すらりと垢脫けして、小説の文躰の祖となれり。

西鶴置土産の一節(井原西鶴)

京は山々近く、松の風も通ひて、冬空の景色時雨まもなく、雪もおもしろ過ぐる程ふりぬ。黒木賣る聲もつねよりはせはしく、今から日の暮るゝ事は夢

じや。寶舟のうち出の小槌も何も持たぬものが、うつてはいかな〳〵茶屋ぐるひするほどの銀も出ぬ世の中、なうてならぬものなれば、つかひ捨てぬうちに分別せよと身にとりたる人の異見も耳にいらず、皆になして、合點のゆく人、それはおそし。昔より女郎買のよいほどを知らば、この躰迄は成果てじ。ある時、泉州堺の島長といへる大盡、はじめは野郎にあそび、毎日にしのび御座舟にみねのこざらしを乘せて、夷島の遊興、世の人のする程の事しつくして、いつの頃よりか都の島原にかよひ、大坂屋の野風に吹きたてられ、次第にくだり舟のぼりつめの女色男色、この二色に身をなし、財寶皆になし、さすが名高き大盡の、幽かなる身となつて、四季小紋のかさね小袖も大かはりして、千種色のもめんぬのこの身せばにして、借屋住居のあはれに、やう〳〵手代どもがなさけ、上下三人の命をつなぐ上荷舟のかし賃を、一ヶ月に四十五文づゝあてがはれて、是にて酢も味噌も、茶も、薪も、萬事の朝夕を辻明ける。あはれや世にある時、惡所へつかはしたる、文飛脚の通ひにしるせしその賃銀も、一月には百目あまり出しけるに、生ながらかやうに成り果つるは我ひとりの思はれて口惜し。それも時世なれば、此浦にて引く網の磯藻まじりの小鰯一かご、わづか五文六文をねぎりて、けふは祝ふ八朔なりと、手づから鱠にして、腹ふくるゝをたのしむは、住める甲斐なくおもへど、其身になつて舌もくひ切りがたし。科きはまりて、首はねらるゝ者も、その日の朝飯箸もつてくふは、人の命ほど惜しきもの無し。この隱者も、何いのるらん、正五九月とて、廿四日におもひ立ち、あたご參詣と、ひとひ二日の旅用意、小者に風呂敷づゝみ、其身もわらんづはけば、下女はつく〳〵この風俗を見て、あの鼻の高さにて、何の願かある。天狗も旦那殿には耻ぬべし。又火の用心も財寶ある人こそ、この地藏をたのみてよけれ。留守あづかるとて、かく長持一つ自然の時は女のはたらきにてものくる身代、貧者無用の物まゐりとおもひながらも、主命なれば、機嫌よく門おくりして立別れぬ。

これより愛宕へ參る路にて、遊廓をのぞくに、女郎ねころびたり。そこへ宿の主婦きて、その女郎にかたるを聞けば、

宿のかゝが、ひねり文に五兩斗りもち添へ、わたくし方へも、半九さまより御

書簡に預りました。御返事によろしく、御禮申してやらしやりませい。やり手の任せに金にかまはぬは昔の事、今の廿兩は上代の貳千兩にもかけあひます。ことに北國衆は、文を國のひけらかし物に、人丸貫之の筆より、おの〳〵さまの書捨を大事にかけ、紙の損ずるをうたてく、裏うちして卷物にし給ふとや。また地の衆の、文は、皆までも讀み給はず、小宿に買ひやり捨給ひ、挽碓の敷紙になりて、大夫さまのお名を、小麥の粉によごすも、よし無し。それと又今の京の大臣くらゐばかりとつて、勝手になりませぬ。とても勤めのお身なれば、殿ぶりの御物好やめにして、たとへ物いひあしく、一座初心にござりませうとも、こんな御狀まいる方が大臣なり。惣じてすいが女郎さまがたの役にたゝぬもの、隨分しやれたる男自慢の人、京大坂堺にもあまたあれど、無分別につかひ捨、揚屋の手前もあぢ惡くまはつて通るは、その心がけのたはけ者、女郎ぐるひばかりに片づけば、末長う遊ばれしを、また野郎に戀をまたげ、あたら身代をつぶし、若盛にあてがひ世帶うご〳〵と生きて居て、何がおもしろい事ある、

といふに、我身の上と身ぶるひして、

嵯峨にゆけば、はや夕暮になつて、人とむる女の袖にたよれば、一夜は爰にさだめしに、筆屋と云ひて、廣座敷なり。折ふしの燒松茸に酒さま〳〵もてなしける。女もふつゝかに見えず。機嫌とりて、立ふるまひも何處やら、お町めきたる所あり。しかも其女は年まへなるが、廊下走りやう、只者とはおもはれず、口說きよりて昔をかたれば、申さぬ事か、島原の座持女郎、土佐と云へるが流れなり。いづれうつり香常ならず。物まいりの精進を、うちやぶりて、太夫に逢ふ心地して、又下向にもたはぶれ、お初尾の殘りを有切にとらせ、山崎よりの舟賃なくて、ひろひわらぢの步行路、中食なしにかへりぬ。是ほど懲りて、此身になつても、やまぬは、好色と、逢ふ人ごとに語りし。

とむすべり。西鶴の後に、江島其磧あり。西鶴の流を汲みて、小說をものし、西鶴より一步進みて、脚色もあれど、其文は、西鶴の神韻を去りて、俗に、輕くしたるものも。

歳德五葉松の一節（江島其磧）

機によつて行ふ時は、其圖にあたらずといふ事なし。勢に乘じて爲す時は、其思必ず遂げむと、范增が項王をいさめことばも、げに、さる事ぞかし。幾億の人をか呑むべき鯨鯢もわづかの人にくるしめらるゝは、そのはかりごとに乘るが故なり。末座にひかへし大五郎、さあ法眼殿、平九郎樣、大切の儀仰出されたからは、いやとあつても血判さすが、さあ此一味連判狀に名をしるし、血判いたさるべし。もし異議に及べば、此方の大事なる故、血判のかはりに、一命を申しうくる。なんと〳〵とつめよすれば、

浮世草子
洒落本

以て、其磧の文躰を伺ふべし。はじめに理屈をつけるは、其磧あたりより盛になりて、馬琴其他の作家之にならひ、ひいて、明治前半の小說家に及べり。

西鶴、其磧の小說は、浮世草子と稱せらる。世態をうつすを主とす。院本で云へば、世話物なり。浮世草子は一變して洒落本となれり。京傳の通言總籬、三馬の辰巳婦言の如きもの、これ也。描寫の範圍を遊里に限りたるもの也。一篇の筋あるものにはあらで、たゞ遊蕩兒の有樣をうつすもの也。當時の吉原は、今日の吉原とは異なりて、大名までも遊びたる、はれの場所也。女に意氣と張とあれ

人情本
江戸時代の物語讀本
實錄物

ば、男には、粹なかるべからず。江戸兒氣象この間にあらはる。京傳、三馬等の作家が、競うて筆をこゝにつけしも、當時の人情世態より見れば、さもありさうな事也。りんす、やんすの所謂里言葉を、そのまゝにうつし、地の文は、みじかく、小さく割かきにして、對話のみをうつしたるものにて、通人ならでは出來ざる、一種の寫實小說也。今の所謂寫生文の祖也。

洒落本更に變じて、人情本となりぬ。爲永春水の梅曆など、これ也。男女の戀愛をうつすを主とす。この風、明治に入りて、更に榮えたり。明治の小說の大部分は、この人情本の變形也。

浮世草子、洒落本、人情本、同じ系統をひきて、變遷し、發達したるもの也。これ院本の世話物なるが、一方には院本の時代物に當るものも起れり。今昔物語、源平盛衰記、曾我物語、太平記の流れは、江戸時代に入りて、老人雜話、太閤記など、其類頗る多く、やゝ小說的傾向を帶びて、繪本太閤記となり、大久保武藏鎧となり、大岡政談となり、更に小說の分子多くなりて、仇討、御家騷動、武者修行等の、實錄にして小說、小說にして實錄なる、所謂實錄物多くあらはれしが、終に歷史小說となれり。

草双紙讀本

柳亭種彦の草双紙、京傳、京山、馬琴の讀本これ也。

種彦の著にては、田舍源氏が尤も有名也。その名の示すが如く、源氏物語をつくりかへたるもの也。唯當時の小説院本の弊にかぶれて、脚色の奇を弄するを主として、わざとらしく、人物性格の描寫がお留守になりて、今日より見れば、源氏物語の方が、遙に自然にして、遙に小説としての價値ある也。種彦は、流麗也。院本と西鶴其績とを、よく調和せるもの也。されど、手腕は近松、西鶴に比すれば、遙に小にして、單調也。

種彦の文章

田舍源氏の一節(柳亭種彦)

次第に更る鐘の聲、鏗々として物凄く、折節其夜は嵐して、唐戸のかり戸透間もる、風は襟より裳より、肌に通り身も冷えて、しぼめる姿花桐は、茫然として居たりしが、早や丑三とおぼしき頃、油つきてか廊下の燈籠、殘らず消えうせて、綾色も更に見えわかず。女の細き心より、是や冥途にありと聞く、暗穴道に迷ひしかと、思へばいとゞ怖氣立ち、口の中にて觀音の御名を唱へて居る折柄、かしこにはつたと物音して、開く唐戸に洩れくる灯光、嬉しや誰ぞとよらんとすれば、きらりと閃めく白刃の光、あつと計りに花桐が、魂ぎる聲を聞くよりも、南無三主人の身の上と、驚く杉生一生懸命、碎けよ破れよと打叩けば、敷居はづれて轉けかゝる杉戸と共にまろび入る。やれ、驚くと莫れと、宣給ふ聲は義正公、左に手燭右の手に、枕刀を携へて、悠然として立ち給へば、かるゝしきこの御有樣、何故あつてと花桐は、はつとばかりに飛びしさり、敬ひ申せば杉生も、隱るゝ隈なくうろ〳〵と、唯身をふるはし蹲まる。義正にこと打笑ひたまひ、今宵に限り夜ふくれども、其方が來ぬがいぶかしく、忍び來りし唐戸口、中より深紅の紐にてこま結び、とかむとすれどこよりにて、八重九重にからみたれば、いとむつかしき心焦れ、刀を拔いて切つたりしが、其光にて驚きつらん。またさえ返る此夜寒に肌薄な其姿、故こそあらめと言ひ給へば、はつとおうけはしながらも、人に罪をゝ負せんと、口籠りつゝ花桐が、うぢつく後に杉生は、耐へかねてやそろ〳〵這ひ出て、憚りながら申しあげます。主人の通ふこの廊下へ、この通り魚の腸や汚物を布きちらし、夫に衣服のけがれたを、取換に妾しが歸りました其内に、兩方の戸をしめ切つて、

難義をかけたいたづらもの、きつと御詮議あそばしてと、言ふを花桐うち消して、これはしたり又者の、身も顧みず恐れ多い。申しあげてよい事なら妾がいふ、退さつてゐやと叱り付けられ諾々と青菜にしほ〳〵立ち去るを、義正やがて呼びとゞめ、あゝ、大事ない、そこに居ろ。扈從もつれず唯一人、こゝへ來たのは予も私し、常とは違ふ、花桐もそのやうに叱りやんな。これ誰かある。畫顔に言ひきかすべき事のあり。早うこれへ連れてこいと、呼ばゝり給ふ物影に、隱れ忍びし桔梗が聞きつけ、驚きあわてゝ、部屋へかへり、もうし〳〵畫顔樣、貴嬢のおつしやる通りにして、お杉戸へ錠を下し、杉生がうろつくを、小菊と二人で好いきみと笑うて居た折思ひがけない、御所さまのおいでなされ、貴嬢に御用があるとの事と、きいて轟く胸おしゝづめ、さあらぬ躰にて畫顔は、衣服あらためしとやかに、かしこへ立ちいて末座につき、お召の御用は何事と、手をつかふれば義正公、機嫌よげなる顔色にて、用と言うて外でもない。夫にゐる花桐が部屋は遙の廊下づたひ、今宵も何やら汚物を散布したるのみならず、通ひ路の戸をしめ切つて、我胤をやどせし女に難義

をかけしは聞きすてがたし。和女の部屋は唐戸の内、寢殿へ近ければ花桐に今より讓り、花桐が今迄の部屋に和女は住むがよいと宣給ふを聞き終り、畫顔少し膝をすゝめ、仰せをかへすは恐れ乍ら、通路の唐戸をしめ切り、花桐に妾しが難義をかけし覺えはさら〳〵。はて、惡い合點な。夫を和女がしたとは云はぬ。部屋をかへよといひつけたは、同じ妾の中ながら、胤をやどした花桐故、身近うおきたき我儘から、今夜の惡戯をした者も、知つては居れど些細な事に、人の名は出したうない。これ畫顔、いつぞや汝にとらせたる、文車には今もつて其儘、紐がついてあるか。えゝ。唐戸を結びし其紐が、何やら夫に似た樣なと、目先へずつと突きつけられ、顔も深紅の色なして、はつとばかりにひれふす畫顔、傍に聞き居る花桐も、共に氣の毒。背くる顔、杉生一人ときみよくにこ〳〵笑ふ山笑ふ、春の朝日のはなやかに、さつと欄間にかゞやけば、寢衣のまゝなるしどけなき姿を人に見られじと、義正公は花桐を、つれて奥へぞ入り給ふ。

京傳は、馬琴の先驅なるが、才筆は馬琴にまさりて、大は及ばず。その弟の京山、

また文才あり。されど、歴史小説家として、馬琴よりも遙に小也。馬琴は、實に空前の歴史小説家也。その著凡そ三百、最も大なるは、八犬傳にして、弓張月、之についで大也。其他一々數ふにいとまあらず。馬琴は當時の小説家の間にありて、識見群を拔き、儒教を祖述して、日本武士の面目を發揮せり。日本國民的文豪也。支那小説をよく日本化せり、今日にあらしめば、西洋の小説を日本化して、一層はなはだしきものあるべし。學ひろくして、文才大也。馬琴を刀とすれば、京傳は小刀なるべし。前賢に比すれば、精練は近松に及ばず、洒落は西鶴に及ばず。粗なる處あれども、馬琴は雄大也。唯、院本の七五調にかぶれたるは、惜むべし。

馬琴の文章

芳流閣上の格闘（瀧澤馬琴）

古人も、禍福は糾纆の如しと云へり。人間萬事往として、塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、はた禍の伏する所彼にあれば此にありとは思へどもかねてより、誰かよくその極を知らむ。

憐むべし犬塚信乃は、親の遺言紀念の名刀、心に占めつ身につけつ、難苦の中に年を經て、得がたき時を得てしかばはるばる滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、此の福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃はもとの物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、事急にして意外にあり。僅に當座の辱を、避けばやと思ふばかりに圍をきりひらきて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ上れどもとにかくに、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を究めたる、心の中や如何なりけむ、思ひやるだにいと痛まし。こゝに又犬飼現八信道は、犯す罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、なまじひに擇び出されつ、他の憂を身の面目に今更用ゐられむこと、願はしからずと思へども、いなみて許さるべくもあらぬ、君命重くいや高き、彼の樓閣は三層也。

その二層なる檐の上まで、身をかすませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月廿一日、きのふも今日も乾蒸の、ほてり渡れる敷瓦は凸凹隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流れは名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退既に谷まりし敵にしあれ

ばいかで我れ、繋きとめむと賠の樹傳ふ如くさら〳〵と、登り果てたる　層の屋根には間伏さすよしもなく、互に透を窺ひつゝ疾視まへあうて立てる形勢、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇のねらふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に尻をうち掛けて、勝負如何にと見上げたり。閣の東西には、身甲したる許多の士卒、鎗長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓枝突きたて、組んで落ちなば擊とめむと、頂をそらしてこれを觀る。加之外面は綿連として杳なる、河水めぐりて砌を浸せば、たとひ信乃武事たけ、臂力衰へずよく現八に捷ち得とも墨氏が飛鷺を借らざれば虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲梯なければ、地上に下るべきにもあらず。渠れ鳥ならざるも羅に入りぬ。獸ならざるも狩場にあり。三寸息絶ゆれば事みな休まむ。脱れ果てじと見えたりける。

その時、信乃思ふやう、初層二層の屋上まで、追ひ上らむとせし兵等を、斬り落しつる後は、絶えて近つくものもなきに、今唯ひとり登り來ぬるは、世におぼえある力士ならむ。這奴はこれ膳臣巴提使が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿角を裂く力ある歟。遮莫一個の敵也。引組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ。目に物見せむと血刀を、袴の稜もて推拭ひ高瀨の如き方桙に、立つたるまゝに寄するを俟つ。

現八も亦思ふやう、彼犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵也。然とても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役義に擇び出されし甲斐もなし。搦め捕るとも擊るゝとも、勝負を一時に決せむものをと、おもひにければ些も擬議せず。

御諚ざふと呼びかけて、もつたる十手をひらめかし飛ぶが如くに方桙の、左の方より進みのぼりて、組まむとすれども寄せつけず。心得たりと鋭き太刀風に、擊つをはつしと受けとめて、拂へば透さずきり込む刀尖を、さゝへて流す一上一下すべる甍をふみとめて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、かさよりおとす太刀筋を、あちこちはづす虚々實々いまだ勝負を判かざれば廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるものもなく瞬もせず氣をこめて、見る目もいとゞはるかなる。

さる程に犬塚信乃は、侮りがたき現八が、武藝に敵を得たりけりと思へば勇氣いや増して、刀尖より火出るまで、寄せては返す太刀音被聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなる、いと高き屋の棟にして、死を爭ひし爲躰、世にも未曾有の晴業也。

現八は着ごみのくさり、肱當の端を裏かくまでに、切りさかれしかど太刀を拔かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第々々に痛を覺ゆれども、足傷を揣りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、現八右手にうけながして、かへす拳につけ入りつゝ、やつと被けたる聲と共に、眉間を望んではたとうつ、十手をちやうとうけとむる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙に飛び失せつ。現八得たりと、むづと組むを、そのまゝ左手にひきつけて互に利腕しかと取り、ねぢ倒さむと曳聲合して、揉みつもまるゝちから足、此彼一齊ふみすべらして、河邊の方へころ〳〵と身をころばし、覆車の米苞坂より落すに異ならず、高低險しき棧閣に削りなしたる甍の勢、止るべくもあらざれど互に取りし拳をゆるめず、幾十尋なる屋の上より、未遙なる河水の、底には入らて程もよし、水際につなげる小舟の中へ、うち累りつゝどうと落つれば傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水烟、纜ちやうと引斷つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出れつ、爾かも追風とひく潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。

和莊兵衛と夢想兵衛胡蝶物語

これ八犬傳中の一節にして、當時尤も喝采を博したる者也。西鶴は文の仙、近松は文の聖とすれば、馬琴は文の豪なる者也。意の人にして、嚴正也。詩人としては、少し情の分子を缺けり。筆おもければ、滑稽物には適せざれども、負けぬ氣の馬琴、何の、我もと、三馬、一九の向を張りて、夢想兵衛物語をあらはせり。これ遊谷子の和莊兵衛の眞似したるもの也。和莊兵衛の思ひつきは、支那の西遊記より出でたるべけれど、名にしめすが如く、老莊の趣を小說に寓したるものにて、日本の小說史上に異彩を放てるもの也。此人の文致は、もつともよく其序文にあらはれたり。

和莊兵衛の序（遊谷子）

我魂を尻の下に敷てつくく〳〵思へば、物を洗ふ水を入るゝ水瓶には、水の垢がつき、油垢を落すぬか袋には、糠の垢が殘る。身の垢を洗はむとして、もろ〳〵の道に入れば、洗ひおとすかたはしから、道の垢がしみ込むを知らず。儒には儒のあか、佛には佛のあか、萬の道にあかあり。其垢を去りて、道を學ぶこと甚だかたし。よき加減に着、氣に合つた枕し、四支を心によせて、眼をとづれば、森羅萬象きそひ來り、或は導き、或は迷うて、其限を知らず。これを號けて玄々界といふ。其世界をやゝ打ち過ぎ、おのづから眼をとぢ、或は鼾高く、或は枕をすて、或は四支をなげうつ。この世界の名を知るもの無し。是をしるもの、よく身の垢を落して、道の垢によごれず。今太平の世に生れ幸に、からげて小便すれば、はや四角な字を習ひ、またげて糞をするやうになれば、はや三十一文字などゝ味なる敎に、根から葉から生ぬけの文盲なもの少なし。中ぶらりのなまにえ人間は、釋迦も、孔子も、氣の毒がられしとなり。予が子孫にも、かの中ぶらり有て、此書を見ば、淺はかなる笑草も、先人の筆の跡と思ひて、皮賢人をやめることもあらむかと、言の行に過ぐるを耻ぢざる

和莊兵衛と八犬傳

滑稽小說

一九と三馬

は、鼠の牙の熊の牙より鋭く、ひよ鳥の聲の鳧の聲より高きが如しと、酒器と共に語りあひて、筆を染むるものならし。

馬琴は、啻に和莊兵衛を學んで、夢想兵衛をつくりしのみならず、八犬傳のはじめの犬の趣向も、和莊兵衛の中より取れるが如し。和莊兵衛の金銀寶玉國の中に曰く、

昔、此國の人の始めは、犬にてありけるが、近國の夷國と相戰の時に、大王敵の首を切つて來りしものは、我娘をゆづらむと張札を出されける時に、犬人吳將軍の首を切つて、くはへ來りければ、倫言汗のごとく、一端の契約なればとて、大王の娘を、其犬にぞやり給ひけるが、情なくも畜生と夫婦のむつびをなし、其子孫末にはびこつて、女は人、男は犬の躰にて候ふなり。

和莊兵衛は、八犬傳の着筆より三十年も前に出來たる書なれば、八犬傳の冒頭の、伏姫が父の約を守りて、犬に伴はれて富山にゆくの趣向は、この條より出てたるものなるべし。滑稽の分子は、夢想兵衛の方が多けれども、まことの滑稽小說は、一九の膝栗毛、三馬の浮世風呂、古今百馬鹿などを推すべし。三馬は、小人的人

物也。されど、よく人情の弱點を看破し、諷世嘲俗の文字、巧をきはめて、優に大なる小說家也。一九は、洒落なる人也。膝栗毛一篇、其哄笑を寫して、人の頤を解く。眞に破天荒也。

一九の文章

道中膝栗毛の一節（十返舍一九）

夫より鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして、橋おちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくりあげて、爰を渡るに、彌次郎北八も、いざや引きつれて、渡りなんとする折柄、京上りの座頭二人連、この川の步渡りなるを聞きけるにや、一人の座頭（犬市）もし、川は膝ぎりもござりますかナ。北八さやう〳〵。しかし水が早いから、おめへ方ァあぶない。用心して渡なせへ。（犬市）ハテ、成程水の音がよつぽと早い（と云ひつゝ、石をひろひ、川の中へなげ込んで考）（犬市）イヤ、こゝらが、どうか淺いやうだ。コリャ猿市。二人ながら脚半を取るも面倒だ。お主若役におれをおぶつて渡れ。（猿市）ハヽ〳〵。づるい事をぬかす。拳て參らう。何でもまけた者がおぶつて渡るのだが、よしか。（犬市）コリャ面白い。サァこんさんなァ梅で。（猿市）りやんご

うさい〳〵（と片手拳うちながら兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握りあひ、（犬市）サァ勝つたぞ〳〵（猿市）エヽいま〳〵しい。そんなら、この風呂敷包を貴樣いつしよにしよはッせへ。ソレ、よしか、さあ來い〳〵（と支度して脊中を向る。彌次郎これは有難と、猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつ〳〵と川へはいり、難なく向へ渡ると、こなたの岸に殘りたる犬市）ヤイ猿よ。どうする。早く川を渡さぬか。（猿市向の岸にて聞きつけ、腹を立）コリャ、じやうだんな奴だ。たつた今、おぶつて渡したに、又そつちへ行つて、おれをなぶるな。（犬市）馬鹿ァ云へ。おのれ斗り渡つて太い奴だ。（猿市）ふといとは、そつちの事だ。（犬市）コリャおのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渡さぬか（と白い眼をむき出、腹立つる故、猿市仕方なく又こちらへ渡りて歸り）（猿市）サァそんなら、おぶさりなさろ（と脊中を出す。北八しめたと手をかへて、おぶされば、猿市又さつ〳〵と川へ這入。犬市は大きにせき込）コレ猿市どこに居る（猿市川中にて）イヤ、こいつは誰だ（と北八を川の中へどんぶり落す）北八オイ助けてくれ〳〵（と手足をもがき流るゆゑ、彌次

郎飛込み、引上くれば、頭から骨迄くさる程ぬれ）北八エヽ坐頭めが。とんだ目に合しやァがつた彌次ハ、〳〵、まづ着物をぬぎやれ。絞つてやらう。北八全躰彌次さんが惡い。なんの、おぶさらずともいゝことに。おまへが手本を出したから、ッイおれも、彌次川へはまつたが氣の毒な。ハヽ、〳〵〳〵、それで一句やらかした。

はまりけり、眼のなき人を侮りし報いは早き川の流れに。

漢文の中にも、狂文あり。風來人、蜀山人、は、國文を以て、狂文をかきしのみならず。漢文にて書けり。一風かはれるは、中井履軒の昔々春秋也。桃太郎、猿蟹合戰などの童話をひとまとめにして、左氏の春秋傳に擬したるもの也。洒落本の風は、漢文にも及びて、寺門靜軒の江戸繁昌記あり。石川雅望にも、都のぶり、吉原十二時ありて、これは、擬古文にて、精妙をきはめたるものにて、江戸繁昌記と和漢對峙すれども、面白さと云ひ範圍のひろさといひ、前者の方が遙にまされり。

紀行も、江戸時代にいたりて、生面をひらけり。この時代には、擬古文の紀行あり、俳文の紀行あり。擬古の紀行も、前代よりは進みて、精しく景色風俗をうつす

滑稽の漢文

江戸繁昌記

江戸時代の紀行

やうになれり。和漢混淆文の紀行も、多く出でたるが、その中にて、橘南谿の東遊記、西遊記、足跡の範圍ひろく、文も亦見るべし。されど、漢文の方には、一齋、艮齋、拙堂、山陽などの名文ありて、國文の紀行、爲に遜色なしとせず。

新井白石、蘭學の端をひらき、青木昆陽、蘭學の祖となりて、江戸時代の後半には、西洋の學問も入り來りたれど、天下は、開國攘夷、尊王佐幕に忙殺せられて、一般には及ばず。おもに醫者の間に行はれて、從つて、醫書の翻譯あり、他の科學の翻譯もぼつ〳〵あり。イソップ物語の如き、文學的作物も、翻譯せられたり。

江戸時代の洋文翻譯

イソップ物語の翻譯

伊曾保物語翻譯の一節

ある仲間、主人の馬に乘て、はるかのよそへ赴きけるに、侍一人行きあひ、怒て曰く、我れ侍の身として、かちにて行くに、汝は人の所從なり。その馬よりおりて、我をのせよ。しからずば、ほそくび切てすてむと。仲間心に思ふやう、此の途中にて訴ふべき人も無し。とかく難澁せば、首をはねられんこと疑なしとて、是非に及ばず、馬よりおりたり。侍、我がものがほに打ち乘て、彼を召しつれ行く程に、さんと云ふ所に難なく着きけり。仲間そこにてのゝし

るやう、我が主人の馬なり。返し給へと云ふ。侍馬に乘りながら、らうぜきなり、二たび罵るに於ては、首をはねんと云ひければ、仲間つゆ屈せずして、其所の守護に行きて、此由を訴ふ。去るによつて、守護より武夫をつかはし、彼の侍をめし具しけり。かくて、彼と是とあらそひしに、守護、理非をわけかねて、伊曾保を呼びて決斷せしむ。いそほ是を聞いて、先づ仲間をかたらうて、ひそかに云ふ、かの侍を糺明せむ時、汝あわてゝ、物云ふこと莫れと、戒めければ、仲間つゝしんで、かしこまる。さて、そのはかりごとに、うはぎをぬいて、かの馬の面に投げかけ、さぶらひに向ひて、この馬のまなこいづれかつぶれたると問ふ。さぶらひ返事にたへかねて、思案すること千萬なりしが、遂に思ひわびて、左の目こそつぶれたれと申す。その時、うはぎを引きのけて見れば、兩眼まことに明かなり。是によつて、馬を仲間にあたへ、彼のさぶらひを、耻ぢしめて、ときの是非をわけられたり。

以上は、德川時代の文章の大要也。俳文あれども、これ一小部分の玩弄品也。和文、即ち擬古文ありたれど、これも一小部分の玩弄品也。鎌倉時代より起りか

江戸時代の普通文

けし和漢混淆文は、一瀉千里の勢を以て、江戸時代の文壇に浸入し、史傳あり、史論あり、政治の論あり、哲學の書あり、道德の書あり、小說あり、院本あり、當時の時文となりて、今の世に及べり。それにつぎて、ひろく行はれたるは、漢文也。和文よりは、却つて漢文の方が、第二の國文として、世に行はれたり。

武士と文章

之を前代に比するに、前代の作者は、公卿也、貴女也、僧侶也。この時代にいたりては、武權と共に、文權も武士の手におちたり。文權は、更に平民にも及べり。

平民と文章

一千年の帝都たりし西京は、死したる都となり、江戸、即ち今の東京が、實際の首都となりぬ。從つて、新清の空氣は、文壇に迸れり。俳句や、狂句や、狂歌や、狂文や、小說や、これ江戸兒氣象より出でたる文學也。和歌、和文の上方贅六の臭氣を帶べるに比して、これらは、江戸兒氣象を帶べり。勁拔、輕快、洒落、瀟洒、意氣を尙び、氣骨あるは、江戸兒の趣味にして、江戸時代の文章にもあらはれたる也。

江戸兒氣象と文章

第七　結論

明治四十年、文章の多く世にあらはれたること、實に空前也。それもいろ〳〵原因あること也。活版出來て、印刷自由になりたること、その一也。明治以前馬琴ぐらゐが、漸く原稿料に衣食するを得たるのみにて、書物の出版は、大抵自費を以て辨ぜしに、明治以後は、操觚事業が可成りの報酬を得るやうになりたること、その二也。新聞の多く出來たること、その三也。雜誌の多く出來たること、その四也。西洋の思想文物のどし〳〵輸入せられたること、その五也。普通教育、中等教育、全國にひろまりて、一般の讀書力進みたること、その六也。

明治の前半

明治の四十年を二期に分つを得べし。即ち明治二十年以前と、その以後と也。前は、西洋崇拜の時代也。後は、自覺の時代也。唯其れ西洋崇拜の時代なり、學問と云へば、洋學也。學者と云へば、洋學者也。明けても西洋、暮れても西洋。政躰も西洋にし、文物典章すべて西洋にし、なほ進んで、西洋人と婚して、人種まで改良せむといふ馬鹿者もいづるにいたれり。ほんの讀本をよみ得る力量でも、洋學

西洋崇拜

だに學べば、十分に衣食するを得し世の中、筆とると云へば、はや、飜譯かと思はるゝまでにて、以て洋文飜譯の盛なりしことを知るべし。されど、いよ〳〵飜譯して見れば、漢學の力なくては、文章が出來ず。日本外史、十八史略、文章軌範の類、そろ〳〵讀みはじめられて、漢學は洋學について必要なる學課となりぬ。英、漢、數の三學が、明治二十年以前の學問なり。著述や、飜譯や、新聞や、大抵、漢文直譯躰の文字に滿ちたり。江戸時代の漢學者の所謂普通文は作れず。一齋點の訓讀をそのまゝに、假名交り文にしたりしもの、これ明治前半の時文也。今こそ平假名を用ゐて、片假名を用ゐるものは、無けれ。當時は、片假名を用ゐしもの、十中七八也。飜譯では、中村正直の西國立志編、最も多く讀まれたり。尺振八の斯氏教育論、中江篤介の維氏美學など、文章見るべし。新聞記者にては、福地櫻痴、御用新聞の日々新聞の主筆として、手腕最も雄大也。成島柳北、栗本鋤雲、矢野文雄、末廣鐵腸、尾崎行雄、犬養毅など、有力なりしもの也。福澤諭吉も、少しおくれて、時事新報をはじめて新聞記者となれり。國學者は、屏息し、否、維新以來、頭をもたげたる神道に就き、和文は從つて世にあらはれず。漢學漢文は、敗殘の身ながらも、洋學に

洋文飜譯

漢文直譯躰

新聞

對して、一敵國をつくれり。安井息軒、林鶴梁等の漢文家逝いて後は、重野成齋、川田甕江、漢文の二大家と稱せられたり。この外、阪谷朗廬、三島中洲、菊池三溪、依田學海、信夫恕軒等の漢文、多く世に出てたるが、學、漢洋を兼ねて、識見群を拔きたるは、中村正直也。福澤諭吉と相對峙せり。

中村正直の文

福澤諭吉の文

福澤諭吉は、明治の初に於ける西洋文明輸入者の最も偉大なるもの也。その文章も、漢文直譯の臭氣なく、御文章、益軒、心學者の系統を傳へて、平易にして縱横自在、實に一大文章家也。この頃、文學の雜誌は無し。東洋學藝雜誌が、幾んど唯一の雜誌也。其名の如く學藝の雜誌也。文章の見るべきものは稀也。外に團々珍聞あり、風來山人、蜀山人の流を汲みて、滑稽を弄べり。靜軒の江戸繁昌記の流を汲みて、柳橋新誌、東京新誌等あり。いづれも、漢文の遊戯文字也。成島柳北、醉多同士、服部撫松、三木愛花など、この種類の漢文の作者也。外にぽつ〳〵漢文漢詩の雜誌あり。穎才新誌は當時少年の秀才の文をあつめたり。小說は、馬琴の讀本と、春水の人情本との系統が、明治前半の文壇に流れ込めり。假名垣魯文が馬琴系統の作家中の錚々たるものなりしが、後に須藤南翠出てたり。政治小

明治前半の小說

說出づるに及びて、南翠は、馬琴をすて〻、政治小說をもものせり。篁村、新二、得知の輩は、春水に一九三馬を加味したるもの也。明治十六年頃に、矢野文雄の半は歷史、半は政治小說なる經國美談出て〻、洛陽の紙價を高からしめたり。之につゞいて、政治小說多く出てたるが、いづれも小說としては下らぬもの也、文章としても、さまで見るべきもの無し。この時代に於ける文壇の革新者は、硬文學にありては、德富蘇峯也、軟文學にありては、坪內逍遙也。逍遙が沙翁の戯曲を譯せるシーザー奇談は、院本の躰を學びたり。當世書生氣質には、馬琴の臭氣あれども、ともかくも、漢學思想と馬琴の流義とに支配せられし勸善懲惡の弊を破りて、今の小說の祖となれるもの也。かくて、蘇峯と逍遙とに導かれて、明治の文壇は、第二期に入らむとする也。

政治小說

明治の後半

德富蘇峯の文

第二期、即ち明治二十年以後に至りても、福澤諭吉は、なほ存生して、新聞の社說をかき、その晩年の作なる福翁百話、平易自在にして趣味ある文章に、彼れが奇拔なる觀察と博大なる常識とを寓して、大に世を動かしたり。されど、この時代の花役者として、一世を風靡したるものは、德富蘇峯也。蘇峯が將來之日本を著は

し、やがて、雜誌國民之友を出したるは、草や松檜のみなる庭園に、新に櫻花をうつしたるが如し。全く漢文直澤躰を破りて、洋文の趣を加へ、清新奇拔の筆を驅りて、政治に文學に新しき思想を發揮したるは、實に一大偉觀也。この風に化せられて、漢文直譯躰は絕をたち、漢文も跡をたちたり。その代りに、和文が一時首をもたげたり。西洋崇拜の弊きはまりて、國粹保存論出て、三宅雪嶺の一派雜誌日本人を出して、一方に雄視せり。國粹論が世にやかましくなるに先だちて、政府にては、大學にて古典科を設け、わづか前後二組の學生を出すに止まりて、其古典科は止まりしが移りて、國文科となり、漢文科となりけるが、古典科を設けたる結果は落合直文、池邊義象の二秀才を出して、國學、和文、こゝに復興せり。二氏、文才あり。和文の系統をひきて、而かも古に偏せざる文躰は、大に世を動かしたり。

國學の復興

落合直文の文

議論文としては、諭吉、櫻痴、おくれて蘇峯の文が一世に重きを爲したるが、議論文が主にして、叙事、抒情に及ばず、文法も正しからざるものありしが、二氏の文、世を動かすに至りて、文法も正しくなりたり。二氏には、議論文なし。されど、叙事、抒情の方面に、新に文法正しき文章の模範を出せり。かくて、全く漢文直譯躰をはなれ、又洋文直譯躰をはなれて、今日の普通文とはなりたり。洋文直譯躰の多かりしことも、明治前半の一現象にして、その臭氣多き文章家も多かりしが、後半に至りては、よく洋文躰を調和して、而かも洋文直譯躰ならざる文章が、一般に行はるゝやうになりたり。論說の方面に於ける蘇峯、叙事抒情の方面に於ける落合、池邊の二氏は、明治の文章史上に特筆すべきもの也。

雜誌

國民之友出てゝ後は、雜誌多くあらはるゝにいたれり。文學の雜誌も、はじめて世にあらはれぬ。尾崎紅葉等硯友社一派の我樂多文庫、小說の雜誌として、世の注目をひけり。ついて、都の花出てたり。坪內逍遙一方に早稻田文學をはじめれば、一方には、森鷗外の棚草紙も出てたり。北村透谷等の文學界も出てしが、太陽出て、文藝倶樂部出て、帝國文學出て、新小說出て、議論に、叙事に、漢文直譯躰は無くなり、洋文直譯躰も無くなりて、今の普通文、即ち江戸の前半に復古したるものが一般に行はるゝやうになりたり。

明治後半の小說

小說に於ては、心情を精寫し、人を描き、社會を寫すといふ流義、西洋の感化をうけて世にひろまりけるが、之が端をひらけるは、逍遙の書生氣質にして、之が祖と

なれるは、二葉亭四迷の浮雲也。文躰も馬琴流の七五調をはなれて、西鶴流が起りたり。尾崎紅葉、幸田露伴、いづれも文才の大なるものにて、はじめは西鶴流を用ゐけるが、だん〳〵進みて口語文の小説多くなり、今は、小説はすべて、口語躰といふやうになれり。口語躰の文は、江戸時代にぼつ〳〵ありしが、明治の世、之を小説に試みたるは、山田美妙齋にして、之を小説に大成したるは、尾崎紅葉也。口語躰は、漸くひろまりて、今は議論文に用ひ、叙事にも及ぶやうになりたり。

口語文

山田美妙齋　尾崎紅葉

新聞雜誌の論説なども、唐宋八家の文躰を學べるやうな空文字も多かりしが、漸々進みて、着實となり、文字上の浮華をさけて、實用を主とするやうになり、政治の論は政治の知識、經濟の論は、經濟の知識、道德の論は、道德の知識、文學の論は、文學の知識に待つやうになりて、浮言誇辭なくなり、實用に適するを主とするやうになりたるは、白石、益軒の昔にかへり、時勢につれて、洋文の躰をも入れて、今のやうに進みたる也。

明治の脚本

江戸時代にありては、脚本は、世にあらはれざりしが、明治の世は、小説と同じく、世にあらはるゝやうになりたり。前に古河默阿彌あり、後に福地櫻痴あり。今は逍遙が脚本の作者として、世の重望をになへり。されど、小説ほどには盛ならず。

明治の書簡

書翰は、鎌倉時代より起り來れる候文躰が今も普通一般に行はる。ぼつ〳〵口語躰も見ゆれど、未だ一般に普及せず。

批評家

批評の盛になりたることは、明治文壇の新現象也。高橋五郎、博覽多才を以て之を國民之友に創めしが、つゞいて内田不知菴、原抱一菴起り、逍遙もやれば、鷗外もやりしが、高山樗牛出でゝ、その奇警の眼孔、その雄健の筆、一代に雄視せり。樗牛死して、批評の文、今に寂莫也。

明治の文章諸家

新聞記者としては、櫻痴明治の前半にありて、一代の雄也。諭吉蘇峯の後には、朝比奈知泉、陸羯南、三宅雪嶺、福本日南、島田沼南、竹越三叉、内藤湖南、黑岩涙香、池邊鐵崑崙など、其著名なるもの也。

茲に明治以來の文章家として名ありしものを、ざつと數へて見むに、普通の散文にありては、福澤諭吉、福地櫻痴、矢野文雄、德富蘇峯、三宅雪嶺、陸羯南、竹越三叉、黑岩涙香、中江篤介、田口卯吉、井上哲次郎、朝比奈知泉、池邊鐵崑崙、正岡子規、内藤湖南、

鈴木天眼、高山樗牛、田岡嶺雲、藤岡作太郎、大西祝、綱島梁川、内村鑑三、田中智學、井上毅、末松謙澄、小笠原長生、北村透谷、山路愛山、鳥谷部春汀、中汀篤介、志賀矧川など、各方面に名ありしもの也。和文の系統をひけるものは、久米幹文、本居豊穎、前田香雪、落合直文、池邊義象、大和田建樹、鹽井雨江、武島羽衣などあり。小說の方面には、饗庭篁村、村上浪六、山田美妙齋、尾崎紅葉、川上眉山、大橋乙羽、幸田露伴、樋口一葉、泉鏡花、小栗風葉、後藤宙外、田山花袋、德富蘆花、齋藤緑雨、夏目漱石など著名なるもの也。坪内逍遙と森鷗外とは、議論、創作の二方面にまたがる。共に文章の大家也。

口語躰と文語躰

今、文躰に就いて言へば、口語躰と文語躰とあり。漢文の力減ずると共に、口語躰の增しゆくは、自然の理也。日本に漢字ある以上は、文語躰も一方に殘れど、大局の勝を制するは、口語躰なるべし。茲に一つ閑却すべからざるは、巖谷小波の

巖谷小波の文躰

お伽噺の文章也。小波は普通の散文家としても、輕妙をきはめたり。殊にそのお伽噺の文章は、小兒にわかるやうにと、平易をつとめて、新躰をひらける上にも、舊來の假名遣に從はずして、發音のまゝに假名を用ゐたるは、日本の文壇、小波の創めし所にて、一般の文章も、將來は、このやうになりゆくかも知れず。

以上唯明治の文章の大要を記するだけ也。余は今茲に精しく批評することをなさゞるべし、否、余の能はざる所也。余は他日を期して、別に明治の文章史を書かむと欲する也。

國文變遷の大躰

つら〳〵日本の文章の發達を考ふるに、我國の文化未だ發達せず、文學もなき中に、漢字入り、漢文入り、支那思想入り、印度思想も入りたり。單に言語に就いて言ふも、純粹の國語は太だ少なし。單純なる社會には、言語も少なくして、事足れども、社會複雜になれば、從つて多からざるを得ず。日本はおひ〳〵社會が複雜になり、思想も複雜になりし際に、漢字入りたり。社會も思想も複雜なる支那の言語を見て、勢之を假らざるを得ず。國語は、漢字を假りて、大に增したり。純粹なる國文は、古事記、祝詞、宣命、平安朝の物語、江戸時代の擬古文の如き閑文字にのみ傳はりて、實用には役立たず。漢文の躰は、既に紀貫之の古今集序、大井川行幸序に傳はり、紫式部の源氏物語さへ、日本書紀をよく讀めるものなりとて、日本紀局の稱を得たり。江戸擬古文の巨臂なる村田春海の如きは、唐宋八家の骨髓を

得たるものなりと稱せらる。平安朝の末に和臭の漢文起り、源平盛衰記の如き和漢混淆文起りついて神皇正統記出でゝ、今日の普通文の基礎こゝに成れり。この文、江戸の前半に盛にして、後半より明治の前半にかけては、一時漢文直譯躰起りしも、後半に至りては、舊に復して、今日の普通文となれり。和文は、古來閑文字也。江戸時代の擬古文は、應用の範圍非常にせまく俳文の範圍もせまく、二者到底漢文の應用のひろきに如かず。かくて、漢文は、第二の國文也。之を要するに、和漢混淆文と漢文とが、主として、我國の文壇を支配し來れる文躰也。江戸の後半よりはじまりて、明治の世になりては、洋學起り、洋語入り、洋字入り、一時洋文直譯躰も行はれしが、やがて、日本化して、普通文となりぬ。洋語入りて、直に國語となれるもの少なからざれど、大抵は漢字にあてはめて、國語となり、其數非常に多し。漢字をはなれては、幾んど國語なしと云ふも可也。口語躰起れりといへどもたゞ文語躰の「なり」「かな」「けり」「たり」を「だ」てある」に變じたるだけにて、大躰に於ては、さまでの差別もなし。よしや、文語躰が、口語躰となるとも、漢語より來れる國語は、益多くなるとも、減ずることはなかるべし。

漢字と國文

日本將來の文字

茲に文字に就いて、しるさむに、我國には、先づ象形文字の漢字が入りたり。ついて、之より脱化して、音標文字の假名が出來たり。近世にいたりて、西洋のアルハベット入れり。漢字を全廢して、假名にせむとの議論も起り、漢字も假名も廢して羅馬字にせむとの議論起れり。余は、今茲に其得失を論ぜむとするに非ず。唯一言、各字形の得失を比較せむに、それ〳〵一得一失あり。羅馬字は數少なく、覺え安く、印刷も便に、歐米共通なる點に於て、大利あり。されど、語原が判らざるやうになり、漢語をうつすには、混同して紛ひ易く、且つ冗長になりて、手數多し。假名は、之に比すれば、字數稍多きが、羅馬字よりも不便也。羅馬の不利なる所は、假名にもありて、世界共通の利は及ばず、二者共に目に訴ふるには、大に不利也。目に訴ふるものとして、世に漢字程便なるもの無し。且つ手短くてすむことも、漢字の長所也。氣早き日本人の性格に適す。されど、字數非常に多くして、覺え難きが、非常なる不便也。世界共通も、日本人の發展上には、心すべきことなれども、目下の處、漢字は東洋共通也。東洋に覇たらむものが、今俄に漢字をすつるは、餘りに早計也。日本は將來如何なる文字を用ゐるべきか、これ今後少なくとも

數十百年を經ずんば解決の出來ざる問題なるべし。近時、世界共通語のエスペラント出來たり。余は、之を以て世界共通語としたきものと思ふ也。日本將來の文字は、羅馬字を望むものは羅馬字を以て、實際に試用して見るべし。いよ〳〵それが便利ときまらば、自然に人は羅馬字に赴くべし。かゝることは、自然の生存競爭にまかすべき也。かくて、優者存し、劣者亡ぶ。今俄に官權などを利用して、無理に改めむとするは、智者の事にあらざる也、得策にあらざる也。

余は茲に日本文章史の稿を終ふるに及び、特筆大書したきことあり。即ち教育勅語也。上古の詔勅は、宣命これ也。後に漢文となり、更に和漢混淆文となりたり。明治にいたりて、漢文直譯躰のものもあり、軍人への勅諭は、和文めきて、やはらかなり。教育勅語に至りては、吾人日本臣民、感泣出づる所を知らず。其文、莊重雄大、古今比なし。實に大手腕の文字也。其言萬古不易の眞理也。實に宇宙間に光彩を放てる大文字也。

教育勅語

日本文章史　終

日本文章史奥附　並製

明治四十年五月五日印刷
明治四十年五月九日發行

定價金四拾錢

著作者　大町芳衛

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

著作權所有

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

每編各專門諸大家執筆

帝國百科全書

定價並製（●一册四十錢●十册叁圓七拾錢●二十五册八圓八拾錢●五十册拾七圓●全部二百册六拾五圓）郵稅一册宛錢八

特製（●一册五拾五錢●十册五圓●二十五册拾貳圓●百册四拾五●全部二百册八拾八圓）郵稅一册宛錢拾

全部二百册
每卷紙數約三百廿頁
總紙數約六萬六千頁

(一)世界文明史
(二)日本新地理
(三)東洋倫理學史
(四)肥料哲學
(五)宗教學
(六)新農產製造學
(七)農產製造學
(八)萬國新地理
(九)支那文學
(一〇)農學汎論
(一一)修辭學
(一二)論理學
(一三)栽培學
(一四)植物學
(一五)邦語營養汎論
(一六)法律汎論
(一七)新代數
(一八)地質學
(一九)森林學

(二〇)民法相續編釋義
(二一)國際公法
(二二)倫理學
(二三)日本歷史
(二四)民事訴訟法釋義
(二五)法學
(二六)商用化汎論
(二七)財政學
(二八)民法物權編釋義
(二九)西洋哲學史
(三〇)日本帝國憲法論
(三一)近世美學
(三二)哲學汎論
(三三)商工學
(三四)地理學
(三五)提要
(三六)造林學
(三七)氣候及土壤論
(三八)商業經濟學

(三九)最新統計學
(四〇)西洋歷史
(四一)分析化學
(四二)民法債權編釋義
(四三)稅關及倉庫論
(四四)東洋教育
(四五)政治汎
(四六)政治風俗史
(四七)日本會送法
(四八)運明制
(四九)社會保護法
(五〇)日本產林
(五一)支那文汎各
(五二)畜產
(五三)森林
(五四)國菌
(五五)微生物
(五六)船化學
(五七)應用學

(五八)農用器具三角
(五九)新撰機化學
(六〇)有機獨逸文典
(六一)邦語學
(六二)無機分析學
(六三)新撰微積分學
(六四)世界宗教史
(六五)增補改訂栽培各論
(六六)農業經濟汎論
(六七)應用氣象學
(六八)植物機械學
(六九)近世新象
(七〇)教育政治
(七一)世界美術史
(七二)物理學
(七三)農藝化學
(七四)教育學
(七五)新撰解析幾何學
(七六)解說批評日本文典下上

(一〇〇)議會及政黨論
(一〇一)土地改良論
(一〇二)獨逸文章論
(一〇三)邦語佛蘭西文典上下
(一〇四)東洋歷史
(一〇五)政裁判法論
(一〇六)行政法汎論
(一〇七)行政法各論
(一〇八)心理學
(一〇九)養蠶及製絲論
(一一〇)銀行、新論（附外國替）
(一一一)支那哲學史
(一一二)家禽各論
(一一三)行政法通論
(一一四)園藝論
(一一五)衞生化學
(一一六)刑事訴訟法論
(一一七)新撰動物學上下
(一一八)保險通論
(一一九)世界宗教制度論
(一二〇)日本產文明史
(一二一)水產法提要
(一二二)議院法制史
(一二三)支那侵略史
(一二四)露國交史
(一二五)最近地理學
(一二六)政治學

(一二七)現代露西亞論
(一二八)金融論
(一二九)稻作改良論
(一三〇)工業政策
(一三一)新撰應用重學
(一三二)世界殖民史
(一三三)植物病理學
(一三四)地文學
(一三五)比較儒教學史
(一三六)日本佛教史
(一三七)園藝各論
(一三八)物理學
(一三九)兒童心理學
(一四〇)食物論
(一四一)世界美術史上下
(一四二)經濟學概論
(一四三)政治學汎論
(一四四)獸醫學
(一四五)應用定量分析論
(一四六)宗教新化史
(一四七)朝鮮教哲學汎論
(一四八)佛教倫理學
(一四九)社會化學論
(一五〇)進化論
(一五一)鑛物學
(一五二)韓國新地理
(一五三)清國商業地理

(一五四)西洋音樂史
(一五五)近世美術史
(一五六)日本文學史
(一五七)普通人類學
(一五八)高等天文學
(一五九)普通物理學上下
(一六〇)處世哲學
(一六一)國家學
(一六二)政治學
(一六三)世心理學
(一六四)近代教育學
(一六五)最新文典
(一六六)日本口語文學
(一六七)佛教倫理學
(一六八)佛語發音學
(一六九)視音字
(一七〇)印度文明學
(一七一)動物學概論
(一七二)文學
(一七三)藝術論
(一七四)最新西洋哲學史
(一七五)言語學上下
(一七六)世界文學史
(一七七)英國文學史
(一七八)比較宗教學史
(一七九)日本文章史

(一八〇)北米合衆國史
(一八一)
(一八二)
(一八三)
(一八四)
(一八五)
(一八六)
(一八七)
(一八八)
(一八九)

二百種二ヲ完結

▲分類目錄▼

●政治汎論　法學士　永井惟直君著
●日本帝國憲法論　法學士　田中次郎君著
●議會及政黨論　法學士　菊地學而君著
●政治學　法學士　南　弘君譯
●政治史　法學士　森山守次君著
●政治學　法學士　津田欽一郎君著
●國家學　法學士　南　弘君著
●國法學　法學士　岸崎昌君　故士中村崎孝君著
●日本法制史　法學士　三浦菊太郎君著
●支那法制史　法學士　淺井虎夫君著
●國際公法　法學士　熊谷直太君　法學士北條元雋君譯
●國際私法　法學士　中村太郎君著
●最近外交史　法學士　原田豐次郎君著
●行政法論　法學士　小原新三君著
●行政裁判法論　法學士　小林魁郎君著
●行政各論　法學士　小原新三君著
●議院法提要　法學士　工藤重義君著

◎法科　政治、法律、○ハ續刊ノ分、●ハ既刊ノ分

●經濟汎論　法學士　池袋秀太郎君著
●經濟政策概論　法學士　守屋源次郎君著
○家事經濟學　法學士　小林魁郎君著
●財政統計學　法學士　河津遲君著
●最新法律汎論　法學士　笹川潔君著
●法學士　熊谷直太君著
●民法物權編釋義　法學士　夏秋龜一君著
●民法親族編釋義　法學士　丸山長渡君著
●民法債權編釋義　法學士　上田豐君著
●民事訴訟法釋義　法學士　丸尾昌雄君著
●刑事訴訟法釋義　法學士　梶原仲治君著
●新刑法論　法學士　溝淵孝雄君著
○英米逸通　法學士　島田鐵吉君著
○獨逸法論　法學士　永井亨君著
●保險論　法學士　宮內國太郎君著
○貿易送原　法學士　奥村英夫君著
●運輸論　法學士　菅原大太郎君著

●世界產業制度論　法學士　相良維男君著
○社會政策　法學士　小野儀一君著

◎商科

●金融論　法學士　佐々木雄二郎君著
●商法汎論　法學士　添田敬一郎君著
●商業經濟學　法學士　清水泰吉君著
●銀行新論（附外國爲替）　法學士　野口弘毅君著
●稅關及倉庫論　法學士　岸崎昌君著
●船舶論　法學士　赤松梅吉君著

◎文科（歷史、文學、哲學、美術、宗教、教育、）

○史學　文學士　阪本健一君著
○日本國民史　文學博士　原秀四郎君著
●日本歷史　文學士　木寺柳次郎君著
●東洋歷史　文學士　幸田成友君著
●西洋歷史　文學士　吉國藤吉君著
●朝鮮史　文學士　久保天隨君著
●北米合衆國史　法學士　山本信博君著
●露國侵略史　法學士　須崎芳三郎君著
●現代露西亞　法學士　須崎芳三郎君著
○國語學概論　文學士　龜田次郎君著
●言語學（上下二冊）　文學博士　金澤庄三郎君　後藤朝太郎君譯
○歐洲小說史　文學士　森田米松君著
●藝術論　文學士　久保天隨君著
●文學概論　文學士　有馬祐政君譯
●英國文學史　文學士　太田善男君編
●世界文學史　文學士　橋本忠夫君著
●支那文學史　文學士　笹川種郎君著
●日本文學史　文學士　林　森太郎君著
●日本儒學史　文學士　大町桂月君著
●近世文章史　文學士　久保天隨君著
●日本儒學史　文學士　久保天隨君著
●世界文學史　文學士　齋藤信策君著
●印度文明史　文學士　常盤大定君著
●近世文明史　文學士　山內正瞭君著
●日本殖民史　法學士　阪本健一君著
●支那風俗史　文學士　白河次郎君　國府種德君著
●日本文明史　文學士　三浦周行君著
●世界殖民史　文學博士　高山林次郎君著

○國語學史　文學士長恒連君著
●解説批評日本文典（上下二冊）　文學士岡田正美君著
●邦語英文典　文學士畔柳郁太郎君著
●邦語獨逸文典　文學士青木昌吉君著
●邦語獨逸文章論　文學士青木昌吉君著
●邦語佛蘭西文典（上下二冊）　文學士松井知時君著
●日本口語文典　文學士鈴木暢幸君著
●修辭學　文學士武島又次郎君著
●哲學汎論　文學士藤井健治郎君著
○純正哲學　文學博士井上圓了君著
●處世哲學　文學士杉谷泰山君述
●西洋哲學史　文學博士蟹江義丸君著
●最新西洋哲學史　文學士岡島誘君著
●支那哲學史　文學士中內義一君著
●宗教哲學　文學博士姉崎正治君著
●佛教哲學汎論　文學士石原即聞君著
●近世美學　文學博士高山林次郎君著
●世界美術史（上下二冊）　文學士小川銀次郎君著
●近世美術史（上下二冊）　文學士小川銀次郎君著

●西洋音樂史　文學士石倉小三郎君著
●論理學　文學博士高山林次郎君著
●社會學　文學士中時彌君著
●比較神話學　文學士高木敏雄君著
●比較宗教學　文學博士南條文雄君譯
●進化論　文學士十時彌君著
●宗教進化論　文學士融道玄君著
●倫理學　文學博士蟹江義丸君著
●社會倫理學史　文學博士井上哲太郎君著　文科卒業木村鷹次郎君閲
●心理學　文學士德谷豐之助君著
○社會倫理學　文學士速水滉君著
●兒童心理學　文學士小林郁君著
●近世心理學　文學士松本孝次郎君著
●世界宗教制度論　文學士德谷豐之助君編
●日本佛教史　法學士工藤重義君著
●支那佛教史　文學士石原即聞君著
●世界宗教史　文學博士前田慧雲君著
●教育史　文學士石倉小三郎君著

●東洋教育史　文學士中野禮四郎君著
●佛教倫理學　文學士蛯川龍夫君著
●最新教育學　文學士中村寅松君編
○教育原理學　ドクトル尺秀三郎君著
●視話音學發音學　文學士遠藤隆吉君著

◎理科　理化、天文、博物、數學、地理、

●有機化學　理學士龜高德平君著
●無機化學　理學士眞島利行君著
●衞生化學　仙藥醫學專門學校教授須田勝三郎君著
●普通物理學（上下二冊）　理學士福井政一君編
○最新電氣學　理學士萩原拳吉君著
●近世氣象學　理學士岡田武松君著
●高等天文學　理學士一戶直藏君著
●應用定量分析　仙藥醫學專門學校教授須田勝三郎君著
●植物學新論　理學士飯塚啓君著
○植物生理學　理學博士三宅驥一君著
●新撰動物學（上下二冊）　理學士會田龍雄君著
●動物發生學　理學士飯塚啓君著
●鑛物學　理學士八谷彪一君著　理學士大築佛耶君著
●新撰算術　理學博士高木貞治君著
●新撰代數學　理學博士高木貞治君著
○新撰幾何學　理學士林鶴一君著
●近世幾何學　理學士藤田外次郎君著
●新撰三角法學　理學士松村定次郎君著
●新撰微分積分學　理學士松村定次郎君著
●解析幾何學　理學士松村定次郎君著
●日本新地理學　佐藤傳藏君著
●萬國新地理學　佐藤傳藏君著
●政治地理學　法學士山本信博君著
○地理發見史　文學士大久保今西藤龍君編
●商工地理學　法學士永井惟直君著
●星學　理學士須藤傳治郎君著
●地質學　理學士吉田弟彥君著
●地質學　理學士佐藤傳藏君著
○測量學　理學士蘆野敬三郎君著
○人類學　理學博士坪井正五郎君閲　理學博士八木奘三郎君著
●普通人類學

◎農科

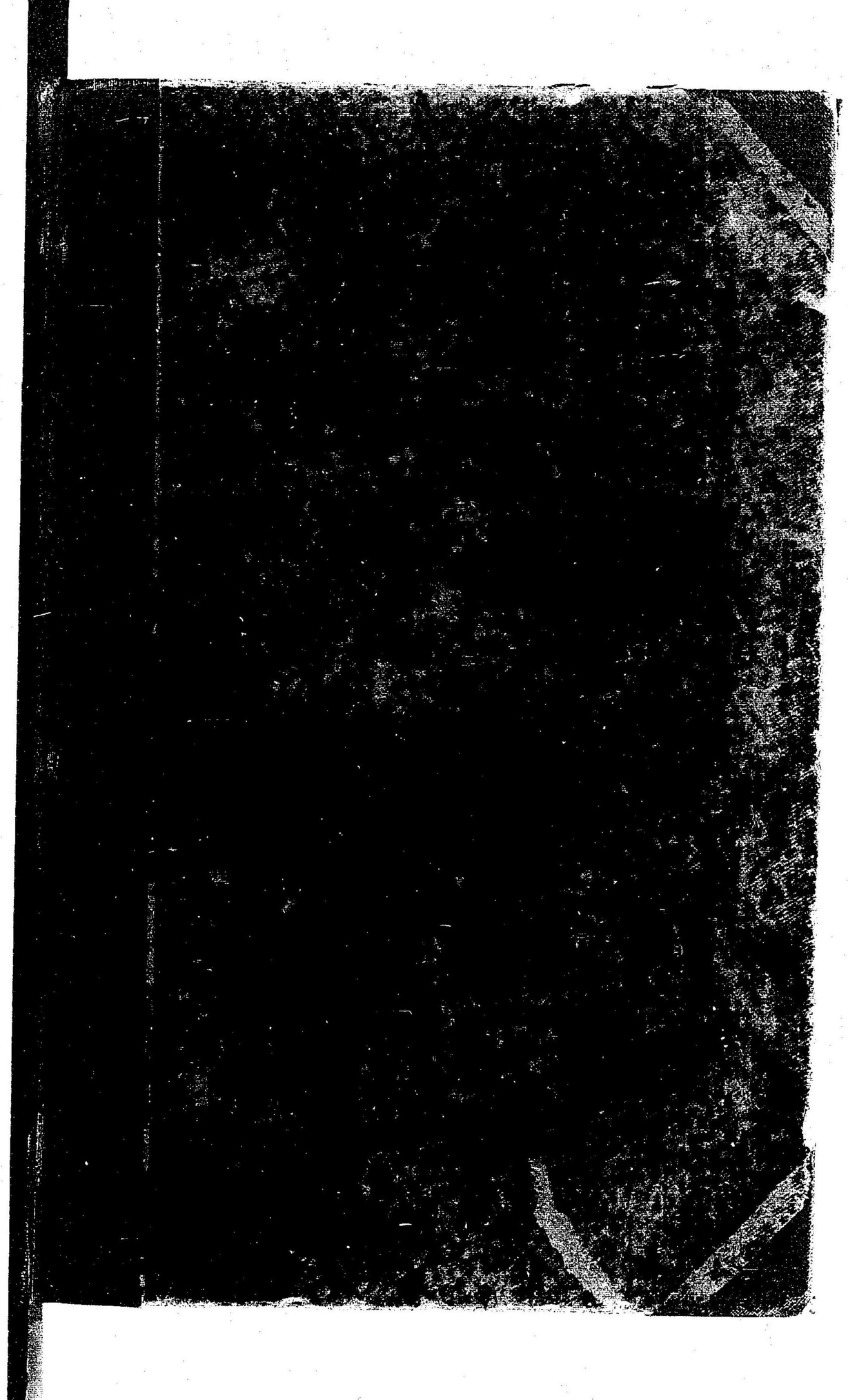
- 農學汎論　農學士　石坂橘樹君著（農業、栽培、園藝、家畜、畜産、森林、）
- 農業經濟學　農學博士　横井時敬君著
- 土地改良論　農學士　澤上野英三郎君著
- 植物病理學　農學士　有馬眞喜君著
- 植物營養論　農學士　田口玄順造君　太郎君著
- 肥料學　農學士　稲垣乙丙君著
- 微菌學　農學士　木下義道君著
- 氣候及土壤論　理學士　佐々木祐太郎君著
- 農藝化學　農學士　井上正賀君著
- 日用化學　農學士　井上正賀君著
- 栽培汎論　農學博士　横井時敬君著
- 增訂補正 栽培各論　農學士　田中節三郎君著
- 稻作改良論　農學博士　横井時敬君著
- 園藝通論　農學士　高橋久四郎君著
- 園藝各論　農學士　高橋久四郎君著
- 農産製造學　農學士　巖君著
- 農用器具學　農學士　西村榮十郎君著
- 食物論　農學士　井上正賀君著
- 養蠶及製絲論　農學士　井上正賀君著
- 畜産汎論　農學士　高見長恒君著
- 畜産各論　農學士　田口晋吉君著
- 家禽學　農學士　月田藤三郎君著
- 水産學　農學士　塚本道造君　農學士　井上正賀君著
- ○乳獸醫學汎論　獸醫學博士　津野慶太郎君著
- 森林學　林學士　奥田貞衛君著
- 提要造林學　林學博士　本多靜六君著
- 森林保護學　林學士　新島善直君著
- 昆蟲學　理學博士　佐々木忠二郎君著

◎工科

- 分析化學　工學士　藤井光藏君著　工學士　内藤游君著
- 應用化學　工學士　蜂屋貞興君著
- 應用機械學　工學士　重見道之君著
- 新撰應用重學　理學士　刈谷他人次郎君著
- 工業政策　法學士　崔田隆次郎君著

博文館

78
3



78
3
Ⓜ

079395-000-7

78-3

日本文章史

大町　桂月／著

M40. 5

DAC-3382